
窓サン

アイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓サン

【Nコード】

N8428Y

【作者名】

アイス

【あらすじ】

世界には、『万能の林檎』というものがある。それを口にすると、それぞれ特有の『万能の力』を手に入れることが出来る。その力は本来なら時が流れるにつれて自然と消滅するのだが、心のどこかで少しでも『力』を求めている場合、『力』は決して消えることはない。

彼は、サンタクロースはそういった人々を、林檎の力を求め続けることから『林檎人』と呼んでいる。

では、何故彼らは『力』を求め続けるのだろうか？

愛する者のためである。

愛する者を見つめたいから、声を聞きたいから、
そして、守りたいから

これは、そんな強欲かつ純情な彼らが懸命に紡ぎ出す、甘くてほろ
苦い『愛の物語』である。

『彼』のご案内（前書き）

どうも！ しばらく留守にしていたアイスですww お久しぶりで
すvv

クリスマス用に一つ長編を書いていこうと思います。

まずは前置きです。

『彼』のご案内

サンタクロース Santa Claus クリスマスの前夜、トナカイの引くそりに乗って子供たちに贈り物をする伝説上の老人。白ひげで、赤い服を着ている。

これが、一般的に知れ渡ったサンタクロース像だ。実在するか否かはともかく、何百年も前から、世界中の子供達に夢と希望を与える存在として語り継がれている。

ん？ そういうお前は誰だつて？

そうだね。とりあえず、ここではサンタクロースということにしておこう。

さて、今からこの本を手にとった君に『愛の物語』を話そうと思う。興味を持つのも、何を言ってるんだと本を閉じるのも君の自由だ。好きにすると良い。

……おや、聞いてくれるのかね？ それじゃあ、さっそく始めよう。

これはクリスマスシーズンに起こった、とある人々の出会いの記録である。

彼らはごく普通の生活を送る一般市民だが、常人の域を超えた『万能の力』を持っている。

かつて『万能の林檎』を偶然にも口にしたこと、それぞれ特有の『万能の力』を手に入れたのだ。

『万能の林檎』とは世界に八本、それも今のところドイツ・アメリカ・日本の3国でしか確認されていない珍種である。その中でも、口にすると『万能の力』を得られる果実はごく僅か。あまりにも数が少ないため、世界はその存在を知らない。と、一つ言っておきたいことがある。

『万能の力』はね、手に入れたとしても、本来なら時間が経つにつれて自然と消え去っていくものなんだ。

だが、『力を手放したくない』と、心のどこかで思っている場合は話が別だ。体が中に秘める力を残そう残そうと働きかけてしまう。そして彼らのほとんどは、『万能の力』を捨てようとはしない。何故だろうか？

理由は実に様々だ。だが、一つ共通点がある。

『愛』だ。

彼らが『万能の力』を求める理由は、それぞれが愛するものにある。

愛するものを見つめていたから、声を聞きたいから、愛するものを、守りたいから。

林檎の『万能の力』を手放さない彼らを、私は『林檎人』と呼んで

いる。その数は計二十二一人。さすがに二十二一人分の物語を一度には語り切れないので、ここでは六人の林檎人を挙げるとしよう。

甘酸っぱくてほろ苦い、そして懸命な六つの『愛の物語』を。

『彼』のご案内（後書き）

それでは、はじまります。

最後まで付き合ってくださいねば、めっちゃ嬉しいです
ミ

プロローグ？ ドイツ ～ バイエルン州 ニュルンベルクにて ～ (前書き)

えー、主人公三人いるので、プロローグも三つあります(おい)

まずはドイツ編からww

プロローグ？ ドイツ ～ バイエルン州 ニュルンベルクにて ～

人口五十万人を超えるバイエルン州でも指折りの大都市、ニュルンベルク。

商工業・文化・経済が盛んであると同時に、ドイツの東西南北を結ぶ鉄道交通の要衝でもある。旧市街は城壁で囲まれており、赤レンガの街並みや石畳の道など、中世の雰囲気を漂わせている。それ故に、特に旧市街は観光名所として人気がある。

旧市街の西には、ペグニッツ川に架かるマックス橋があった。ペグニッツ川沿いには昔ながらの建物が数多く残っており、絵になる風景が広がっている。

その橋に、赤毛を三つ編みにして束ねた一人の少女がぼつりと立っていた。手すりに腕を乗せ、川の水面をぼんやりと眺めている。その顔には表情というものがなく、傍目では何を考えているのかわからない。

ふと、少女の口が開いた。唇がゆっくりと動き、一つの言葉を紡ぎ出す。

「会いたい」

少女は顔を上げ、体を翻して走り出した。

* * *

この街には、木組みの古い家々が連なるヴァイスゲルバーという名の小路がある。張り出し窓が美しいという以外にはこれといった特徴は無いが、おとぎ話のような可愛らしい家々は、古き時代の趣を

感じさせる。

それ以外はとりわけ地味な小路に、古びた小さなパン屋が佇んでいた。入口には『パン工房 蜂の巣^{ビテンコルプ}』と書かれた黒板が立て掛けてあり、隣にロッキングチェアに座る等身大のディスプレイがある。時折ゆらりと揺れる愛くるしい姿が、羨びた店に暖かさをもたらしている。

店内には数名の客がいる。店主の仏頂面を全く気にせずパンをせつせと選んでいる者ばかりで、おそらく常連客がほとんどだろう。レジに客がパンを持っていき、店主が金額を言うと言つとコインが出された。流れるように会計が終わると、緑の瞳の店主はパンを袋に入れた。

「はい、ありがとうございます」

パンを渡し、客が店を出ていく。また店内の客がレジに来ると会計を済まし、パンを袋に入れて渡す。日常的な光景が、パン屋の中で淡々と繰り返されていく。

その店の前に女が立ち止まった。

切り揃えた栗色のショートボブヘアに、白いコートが良く映える女性だ。顔に掛かった横髪を退かし、顔を上げ、瞬きをする一つ一つの仕草に品があつて、それなりに顔の整った彼女をより美しく魅せている。

女は肩紐の付いたバッグを片手に、ハイヒールを鳴らして店の古い扉を開いた。個人経営の小さな店なので中は狭く、入った側からレジが目飛び込むくらいである。

「いらつしゃ……………」

女を見た瞬間、中年の男店主の顔色が変わった。眉を顰めて彼女をじろりと睨み出す。

女は涼しい顔でトレーを手に取り、ホットドックをいくつか乗せてレジへと歩み寄る。無愛想面に拍車が掛かった店主に恐れを抱いて

いるのは、全く無関係な店内の客達の方だった。

店主は睨み続けながらトレーを受け取り、会計を始めた。女から金を受け取り、袋にホットドックを詰めていく。そして袋を閉じたところで店主の重い口が開いた。

「何度言っただって、見舞いには行かないぞ」

眉を顰める店主に、女が困ったような笑みを浮かべる。

「彼、あなたに会いたがってますよ」

「冗談じゃない」

「やっぱり、まだ怒ってらっしゃるんですね」

「当然だろ。自分の娘を、命の危険に晒されたんだからな」

物騒な台詞が店主の口から吐かれる。

だが無愛想であっても、店長としてその辺りは配慮したのだろう。

最後の台詞だけは、女にしか聞こえないよう小声で唸り出されたものだった。

恨み言としか取れない台詞を小声で、それも一人に絞って向けただけあって、背筋が凍りつきそうな憎悪を感じ取ってしまう迫力があつた。その無愛想な顔付きも手伝って尚更だ。

「店長、彼が本気でお嬢さんを見殺そうとしたと思ってるんですか？」

「弄んだろっが」

「ですが、お嬢さんを見殺しにする気も弄ぶ気もありませんでした。彼はただ」

「もう言うな！」

堪忍袋が切れたのか、店主は言葉を遮ってついに怒鳴ってしまった。さすがに客の視線がレジの方に集中する。店主は「すみません」と客達に頭を下げ、目の前の女を更に睨んだ。

だが女は少しも臆することなく、落ち着いた様子で口を開いた。

「分かりました。今は引き下がります」

「二度と来るな」

静かだが、その分怒気の籠った声で言い放った。

女は目を伏せながら、店主の手にある袋に手を伸ばす。怒りで袋を渡すことを忘れていたのか、店主がハッと目を見開く。そんな彼を余所に女はまた微笑みを浮かべた。

「失礼します」

それだけ言い残し、女は店を後にした。店主は小さな溜め息を吐き捨てた。

本当なら、私は謝罪をしなければならない立場なのだ。嫌というほど分かってる。

でも、娘は関係無い。

それを思うと、どうしてもああやって怒りが込み上げてしまう。だからといって、彼を加害者呼ばわりすることは出来ない。

彼の、彼らの人生を大きく左右してしまったのは、この私なのだから。

負い目を感じる反面、怒りで謝ることが出来ない、どうしようもない自分がある。

私は、どうすればいい。

店主はレジに立ちながら、怒りと自責の念に苛まれ続けるのであった。

* * *

レイラ・ヴィーンはをさっきのパン屋を出た後、徒歩で十分ほどの

何があっても、絶対にこの人を手放したくない。

レイラは笑みを零しながら青年の眼鏡を外す。眼鏡を小棚に置き、俯いて自身の顔を下へと掲げ出した。青年の顔に、ゆっくりと彼女の顔が重なるうとした時だった。

ふいに後頭部に軽い衝撃が走り、体が下へと傾く。そして唇に温かい感触が伝わった。

一瞬驚いたものの、彼女はすぐに己の状況を理解し、うっとり目を閉じた。

彼女は今、目の前の青年に頭を引き寄せられ、口付けられている。柔らかくほのかに温かい唇の感触と、頭を抱き寄せたまま離さない手のぬくもりが、何よりの証拠だ。レイラも応えて、手を彼の頭に撫でるように添えた。ふわりと柔らかい髪の毛の感触が直に伝わる。

傍から見たら破廉恥極まりない状態が数秒続いたところで、彼の手が彼女の頭から離れた。それを合図に、レイラは体を起こした。

「ごめん、やっぱり駄目だったわ」

青年の臉がゆっくりと開いた。鮮やかな色合いの碧眼が、彼女の悲しげな微笑みを捉える。

「そうか。ありがとう、レイラ」

セシル・シュライファーが明るい調子で微笑む。レイラも釣られて笑みを浮かべた。

「ねえ、いつから起きてたの？」

「『また、眼鏡掛けたまま寝て』ってところから。全く、朝っぱらから何をするかと思えば」

口ではそう言いながらも、満足げな笑みを浮かべた。調子に乗って体を勢い良く起こす。

「っ」

だが、不意に鋭い痛みが胸を走り、最後まで起こし切ることが出来なかった。

「まだ無理に動かしちゃ駄目よ」

レイラは顔色を変え、顔を歪めて胸を押さえる彼をそっと寝かせた。「ちえ」と口を尖らせる彼は、お菓子を買ってもらえずに拗ねる子供そのものだ。

「来たばかりで悪いけど、用事を思い出したからちよつと席を外すわ。すぐ戻ってくるからね」

「分かった」

レイラは弟をあやす姉のような笑みを浮かべて立ち上がり、扉へと歩き出した。そして扉を開く寸前にセシルの方へ振り返った。神妙で、悲しそうな顔をしている。

「ねえ。ついでに、もう一度来てもらえるように説得してみる？」

「いや、もういいよ。あの人、とことん頑固だから一度決めたら動かないから」

レイラは「そう」と再び背を向けて扉を開いた。扉が閉まると共に、再び静寂が訪れる。

「罰が当たった、ってやつかな」

静かな部屋で、ぼそりと呟いて苦笑した。

興味を持った人に近づき、少しだけその人の領域に足を踏み込んでみる。

ただの気まぐれだから、深く関わる必要は無い。本を読んでいるような気分に入るだけで十分だ。関わる人達を、物語の登場人物に置き換えて。

でも、今回に限っては少しも関わるべきではなかった。

お互い、知らない方が良かったんだ。
きつと、これまでで最悪な気まぐれだった。僕はそう思う。

セシルは去年のクリスマスシーズンを思い出しながら、天井をぼんやりと眺め出した。

プロローグ？ ドイツ 〽 バイエルン州 ニュルンベルクにて 〽 (後書き

次はアメリカ編ですWW

プロローグ？ アメリカ 〽 ニューヨーク州 マンハッタンにて 〽 (前書

アメリカ編のプロローグです。ドイツ編とは繋がりありません？

プロローグ？ アメリカ ～ ニューヨーク州 マンハッタンにて ～

マンハッタン区の南部、ダウンタウンにある町、グリニッジ・ヴィレッジは街路樹と調和した煉瓦の家々が特徴的で、摩天楼だらけのニューヨーク内でもお洒落な街並みである。また、この街には昔ながらのカフェやレストラン、ナイトクラブが数多くある。

明け方を迎えようとしながらもまだ暗い冬の下で、グリニッジ・ヴィレッジの一角に佇む『CANDLE』キャンドルは青白い光を看板から静かに放っている。

だが、扉の先は一転して賑わっていた。店内を幻想的な紫と赤が照らす中、多くの若者が夜ということも忘れる勢いで大騒ぎしていた。彼らの視線の先では、スポットライトの光を一身に集めたロックバンドが楽器をかき鳴らし、店内に雄叫びを轟かせている。

女将はカウンターからその光景をぼんやりと見つめていた。女将は一つに束ねた黒髪に黒い瞳、一重瞼に健康的な肌色と、明らかに東洋人の風貌をしている。

ディージェンファ天焰花は腕時計を見てもうすぐ閉店の時間であることを確認すると、カウンターを出て壁沿いに歩き、店の端まで移動した。

立ち止まったのは、『STAFF ROOM』という表札の掛かった扉の前だった。ヤンファはドアノブを捻って扉を開け、中に入った。扉を閉めても、店内で暴れる音楽と歓声はまだ煩いくらいに耳に飛び込んでくる。だが、この店に慣れきったヤンファからしたら、部屋に入って扉で遮っただけでも大分音が小さくなったと感ずるのだった。

この部屋は、主にこの店で演奏するバンドの控え室として使われている。化粧台にパイプ椅子、洋服掛け、その他の雑多などでありのスペースを取っているが、それでも控え室にしては大きい方で、数人が入っても窮屈しない程度の広さはある。

「起きたかなー？」

ヤンファは散らかった部屋の中に、二人の男女の姿を確認した。

女の方はパイプ椅子にもたれていた。ショートカットの茶髪と小生意気そうな猫目、そしてジーパンに肩出しのセーターという薄着が、彼女の自由奔放さを増徴している。

「あ、ヤンさんお疲れ。レオン、ヤンさん来たよ」

男の方は化粧台に突っ伏していた。余程深い眠りに陥っているのか、女が体を起こして黒髪パーマを指に巻いたり乱暴に引っ張ったりしても微動だにしない。

「レオン、ねえレオンってば。起きろコラ」

ジェイミー・アンダーソンは男の髪ごと頭を持ち上げ、化粧台に叩き付けるといふ暴挙を試みた。だが、それでもピクリともしない。

「あれま、どしたの？ まさかあまりの疲労で意識ぶっ飛んだとか？」

「意識はあるわよ。『うう』とか『があ』とか言ってたし。どんだけ眠り深いんだよ、こいつ」

拳句の果てには髪から手を離し、頭に靴の裏を押し付けるといふ暴君じみた行為に走ったが、んぐうと唸り声を上げただけだった。

「仕方ないよ。クリスマス前後はライブが多かった上に、誰かさんが足突っ込んだ騒ぎに巻き込まれちゃったし、新年に入れば入るでまたライブ三昧だったしね」

「ち、世話掛かるわねえ……っ！」

ジェイミーが足を振り上げて男の頭に振りおろした。化粧台に盛大に叩き付けられたところで、男はようやく「ぐう！」はつきりとした呻き声を上げた。

「お、今度は手応えあり？」

「あるといいねえ。いや、絶対にあるよ。今のはさすがに。無かったら病院沙汰になる」

平然と暴力行為を働くジェイミーはもちろん非常識だが、今までの暴力行為を目の当たりにしても顔色一つ変えずにのんびりとした口調を保っているヤンファも十分非常識だろう。

そんな非常識極まりない女二人に見守られながら、男はようやく体を起こした。眉を顰めて頭を押さえてはいるが、盛大な被害は全く感じられない。

「お前な……………」

レオン・エヴァンスの脳はまだ覚醒したばかりだが、すぐに状況を理解してジェイミーを鬼の形相で睨み付けた。ジェイミーは怯えるどころか人を小馬鹿にしたような笑みを見せる。

「普通に起こせよ!」

「起きなかつたじゃない」

「だからって頭に蹴り咬ます馬鹿がどこにいる?」

「いるわよここに」

「開き直りやがって!」

「はいはい、ストロップ」

これではキリが無いと彼らの間にヤンファが入って宥めた。

「痴話喧嘩はこれくらいにして、そろそろ帰ろつさ。もう朝になるんだし」

「痴話喧嘩って何ですか?」

「誰にだってそう見えると思うけどねえ」

「こいつはオカマなんですよ?」

レオンが声を張り上げて指差した先は、どう見ても女にしか見え無いジェイミーだった。

「大丈夫だって。同性結婚で結ばれたカップルって、この国じゃいっぱいいるんだから」

「そういう問題じゃないでしょう?」

「どつちにしろ、アンタには重大問題なんじゃない?」

口を挟んできたのは、オカマだと言われた当の本人だった。

「アンタもうオヤジなんだから、結婚願望あるなら早く手え付けないと手遅れになるわよ」

「誰がオヤジだ！ 俺は昨日三十になったばっかだぞ！」

「中学生から見たら三十代の男なんて立派なオヤジよ。つーか、だれがオカマだった？」

「お前だお前！ 男のくせに女の格好して女みたいな喋り方してる時点でそうだろ！」

「だからあ、オカマじゃないって。何度も言ってるじゃん。ただのあ・そ・び」

「もつと質悪い！」

「言つとくけど、女装趣味があるのは認めてるわよ。こんなにスタイル良くて可愛いんだもん」

その自慢げな一言で、『オカマ』じゃなくて『女装癖』の方が効果的だったと後悔した。

怒鳴ってばかりだったレオンは、顔を真っ赤にして肩で息をする有様となっていた。

「まあ、アンタが女装なんてしたら、かなりのお笑い種だろうけど」
デカイ図体の負け犬と化したことを確認したところで、ジェイミーはいきなり肩出しのセーターを脱ぎ出した。レオンは反射的に後ずさりし、バツと目を片手で覆う。

「そんなに恥ずかしい？ 男の裸を間近で見るの」

微かに開いた指の隙間から見えたのは、下着を脱いで胸のパットを取るジェイミーだった。

「あれえ？ まさかと思うけど、興奮してる？ うわ、きつも」

「んなわけあるか！」

ジェイミーの言葉と上半身によって、自分がどれだけちぐはぐな行動を取っているのか理解し、バツと顔から手を離してジェイミーを睨みだした。

「何じろじろ見てんだよ。気色悪い」

ジェイミーの口から発せられたものだったが、声は若い男となって

いた。

「えー、もう男に戻っちゃうの？ つまんないなあ」

顔を赤くするレオンを余所に、ヤンファは相変わらず平常のままだった。

「男に戻る用事が出来たんだよ」

ジェイミーは淡々と語りながら洋服掛けから長袖を取り、着々と着替えていった。最後に洋服掛けからコートを取って羽織る。

「男に戻ったとはいえ、気を付けるんだよ。あんた可愛い顔してるだから」

ジェイミーは「ばーか」と憎たらしい返事をしながら床のシヨルダ―バッグを手に取ると、レオンにまた勝者の笑みを差し向けた。表情や仕草も完全に男と化している。

「じゃあなオツサン。せいぜい良い夢見ろよ」

それだけ言い残すと、ジェイミーは扉を開けて店内へと踊り出した。「すっかり振り回され役になっちゃって、あんたも大変だねえ。見てて楽しいけど」

ヤンファのフォローだかおちよくっているのか分からない発言に、今度は溜め息を付く。

「確かに乱暴だし口の利き方がなっちゃいけないけど、根っからの悪い子じゃないよ」

「別に、嫌いではないんですよ。ただ、掴み所がなくて苛々するだけ」

「そうかなあ。あの子は素直じゃないだけで、意外と分かりやすいと思うけど」

全く正反対の意見に、レオンは思わず怪訝そうに眉を顰めた。

「分かりやすい？ あいつが？」

「うん。まあ、レオンくんは素直過ぎるから、あの子のことが分からなくても無理ないよ」

ヤンファは笑いながらサラッと言いのが、レオンとしては「単細胞」と言われたようでどうも腑に落ちなかった。実際、裏を返せ

ばそういう意味のはずだ。

「さてと、そろそろ店に戻ろうさ。もうすぐ閉店だしね」

ふて腐れるレオンなどお構いなしに、ヤンファは控え室を出て行った。本当にいつだってマイペースな人だ。だからジエイミーの身勝手な言動に振り回されたりしないんだろう。

まだふて腐れていた気分だったが、マイペースなヤンファのことだ。もたもたとしていたら閉店後の店の中に閉じ込められてしまう恐れがある。それは勘弁願いたかったので、レオンはパイプ椅子から重い腰を上げ、控え室を後にした。店内を揺らす演奏は既に止んでいて、閉店の合図でもあるBGMが流れていた。

さきに控え室を出たヤンファは、通りかかったカウンターで既に控えていた。レオンが「お疲れ様です」と声を掛けると、ヤンファは何やら意味ありげな笑みを浮かべた。

「店を出る時、よく周りを見回してごらん」

レオンは首を傾げながらも、その通りにした。店を出る際に一度立ち止まり、周りをキョロキョロと見回す。別に何も無かった。拍子抜けしながらも、ホッと何となく安堵する。だがそれも束の間だった。歩き出してすぐ側の路地裏に入った時だった。

ガツという音と共に、何かが行く先を遮った。

踏切の遮断機のように前を塞いでいる。暗くてよく見えないが、どう考えても人間の脚だ。それもよく知ってるクソ生意気なガキの。

「おい」

行く手を遮ったのは、壁に寄り掛かって靴の裏を前の壁に押し付けるジエイミーだった。

「てめえにも用があることを思い出した。ついて来い」

拒否権なんざねえよと言わんばかりに顎で使ってきた。レオンはまた溜め息を吐く。

「人が家で一息付こうって時に、一体どこに連れてく気だ」

「馬鹿かお前？ てめえと行くところなんざ決まってる」

確かに、このクソ生意気なガキと一緒に並んで行く場所なんか一つしかない。

こいつの家だ。こいつの姉、エミリの部屋。

いちいち勘に触るガキだが、去年のクリスマスシーズンで確信したことがある。

彼の言動は、全て姉を家族として深く愛するが故だということ。

それを知っているからこそ、ため息を吐きつつも彼の言動を憎めないレオンであった。

プロローグ？ アメリカ 〽 ニューヨーク州 マンハッタンにて 〽 (後書

次は日本編ですWW

プロローグ？ 日本 〱 東京都 渋谷にて 〱 (前書き)

日本編のプロローグですww 前回と同じく、これも他のプロローグとは一切繋がりありません？

渋谷駅南口から徒歩三分の閑静なエリアに小さなバーがあった。飾り気が無いものの、木材をふんだんにあしらった外装と地下への階段が、隠れ家のような雰囲気醸し出している。『Alice』と掘られた洒落たデザインの看板が、ぼんやりと店を照らしている。その店の前に、左の口元に黒子がある長身の青年が立ち止まった。少し癖のある黒み掛かった茶髪は肩に届くか届かないかくらいのミディアムヘアで、瞳はスツと引き締まっていながらも、きつい印象を与えない優しさがある。

氷月燦太郎ひつきさんたろうは木の扉を押し開き、足を踏み入れた。この時間帯はまだ開店したばかりで、客の数が少ない。カウンターに向かうと、そこには親友とマスターの姿があった。

「よつ」
後ろから声を掛けると、親友の金亮しんがねやうがこちらを振り返った。

「こんばんは……って、あれ？ 何かほっぺ、微妙に腫れる気がするんですけど」

「大したことない。ちょっと用事を済ませてきただけや」

「はあ……」
逆立った金髪に野生の狼を思わせる鋭い瞳、右耳の赤いピアスと、店内でも悪目立ちしているパンク風の格好だが、近寄り難い外見とは相反した穏やかな性格で、ごく普通の健全な大学生だ。男にしては小柄で、派手な外見と鋭い目付きを取ってしまえば迫力など欠片も無い。

「モーツァルトミルク」
亮の隣に座って早速注文すると、マスターは「あいよ」と返し、カクテル作りに取り掛かった。バーのマスターをやっているだけあって、手慣れた動作は俊敏かつ鮮やかである。

「あの、燦さんさん、何かあったんですか？」

ぼおつとマスターを眺めていたら、ふいに亮が声を掛けてきた。

「何でや」

「頬杖付きながら、指をトントンって動かしてるから」

指摘されたことで、いつの間にか頬杖を付きながらカウンターを人指し指で軽く叩いていたことに気が付いた。咄嗟に手の位置を元に戻す。

何かあったのか？ その指摘も凶星だった。

でも、こいつがそんな鋭い洞察力を持っているとは思えない。

「だから何で」

「嫌なことがあった時にする癖だって、マスターが言ってた」

「なるほど」

自分の心境を暴かれるのは不本意だが、このマスター、彩宵沢聖の発言なら納得出来た。

「凶星か。普段からクールぶってっけど、意外に分かりやすいよなあ。アンタ」

マスターがシェイカーを振りつつ口を挟んだ。してやったりって顔でムカつくわ。

思いつきり舌を鳴らしたかったが、それでは相手の思う壺なので内心で舌打ちをする。

「俺のこと分かりやすい言うのは、あんただけやで」

「そうか？ じゃあ俺の洞察力が並はずれて優れてるってことでアホなことを言いながらマスターがカクテルを差し出す。受け取ったグラスに唇を付けて流し込むと、チョコレートの甘ったるさが口いっぱい広がった。

甘美な味わいに酔いしれていると、ふと話題が脳裏に浮かんだ。今の心境をこれ以上暴かれたくない燦太郎としては、実に都合の良い話題だ。

「そついやお前、希実ちゃんとはどうや？」

この一言で、グラスに口を付けた亮の顔がサツと真つ赤に染まった。
「えっと、それは……………」

口にするのも恥ずかしいのか、亮は自らの言葉をも呑み込むかの如くカクテルを一気に飲み干した。だがそれが返って仇となり、ゴホゴホツと盛大に咳き込む羽目になった。

「おいおい、落ち着きや」

何もむせることないやると呆れながらも、すぐに亮の背中に手を置いてさすってやった。酷い咳き込みぶりだったが、背中をさすっている内にだんだん落ち着いていった。

「で、どうなんだ？ 根性なし」

またしても聖が突っ込んできた。悪質な毒舌は、この男が口を開く時のお決まりだ。免疫が付いた一部の者はそれとなく流せるが、ほとんどはこの毒舌に弄られ翻弄される始末だ。

「まあ……………上手くいつてますよ」
だが亮に至っては例外だ。

聖と出会ったばかりで免疫なんて無いはずなのに、どんな毒舌が降ってこようが翻弄されず、しかも真面目に返答する。外見とは裏腹に非常に温和で、生まれてこの方本気で怒ったことが無いらしい。聖の躊躇無しの毒舌にも耐えられるわけだ。

当然聖は面白くないわけで、更なる毒舌を駆使するべく口を開く。

「上手くいつてる、ねえ。どこまでいつたかが問題だよな？ 根性なしのことだからまだヤツちゃいないだろうが、キスぐらいはしたんだろ？」

「……………手に、触れた」

「はあ？ チキンみてーな頭してとことん根性ねえなあ、おい。今時中坊でも堂々といちゃついでんだぜ。いつそのこと、中坊のカツブル適当に捕まえて、『僕、好きな子と手を繋ぐことすら出来ないチキンなんです。どうか恋愛のテクを教えてください！』って土下座して仕込んでもらえよ」

「あー、それやったら変質者として速攻捕まるから遠慮しときます」

亮はやはりあっさりと答える。聖はとうとう堪忍袋の緒が切れたのか、チツと舌打ちをした。

「相変わらず面白いのねえ奴だな、てめえは。少しは反論しろよ」

「そう言われてもなあ。本当のことだし」

横で嘸み合わない会話を聞きながら、燦太郎は残りのカクテルをぐいっと飲み干した。

……さすがに、そろそろ行かんとマズイわ。

「」馳走さん」

席を立て勘定すると、亮が目を丸くした。

「燦さん、今日は早いですね」

「ああ。明日も朝から仕事やだな」

嘘だった。明日は久々の休みだから、別に早く帰る必要は無かった。さっきまでは。

「まあ、あんま構え過ぎんと頑張りや。何かあったらいつでも相談乗ったるで」

「あ……うん。ありがとう」

また頬を赤らめる親友の背中をポンと力強く押してやり、燦太郎は店を後にした。

* * *

渋谷駅から井の頭線の電車に乗り、下北沢駅で下車する。それから三分ほど歩くと、六階建てのマンションに辿り着く。エレベーターを使って四階まで移動する。いつも通りだ。

だが、自分の部屋の鍵を開けてドアノブに手を伸ばすところで必ず躊躇ってしまう。ここ最近ずっとそうだ。開けるのが、怖くなる。

大丈夫やて、俺。

昨日かって一昨日かって、ずっと大丈夫やったやろ。

湧き上がる小さな恐怖を押し殺し、ドアノブを捻って扉を開けて中に入った。今大丈夫だって言い聞かせたばかりなのに、思わずバツと下を見る。ちゃんと子供用の女物の靴があった。

良かった。ちゃんという。

燦太郎は胸を撫で下ろすと、靴を脱いで部屋に上がった。リビングを抜けて別の部屋の前に立ち止まる。ノックをし、「起きてるか？」と尋ねた。

返事は無い。燦太郎は「開けるで」と声を掛けてからそつと扉を開いた。

扉の向こうには、何とも女の子らしい空間が広がっていた。白やベージュ、茶色を基調としたごく普通の部屋だが、ベッドにはぬいぐるみがいくつも置いてある。少々散らかってはいるが、それを除けば女の子らしく飾られた可愛い部屋だ。実際は燦太郎の部屋なのだが、今は違う。

部屋にはぬいぐるみに囲まれて眠る一人の少女がいた。ふわりと緩やかにうねる金髪のワンレングスヘアで、小学五・六年くらいと見受けられるが、どう見ても日本人じゃない。その子供らしい平和な寝顔は、目鼻立ちが整っていることもあって人形のような。

彼女の隣には、白いティンバーが一つ。彼女の胸に抱かれた、古びてぼろぼろになった白クマを見て、燦太郎は思わずほくそ笑んだ。

あんなことがあったのに、まだその白クマ抱きしめてくれるんやな。

去年のクリスマスシーズンを思い出し、思わず「ごめんな」と呟く。

謝りながら、その頬を優しく撫でた。「ごめん」って言うの、これで何度目やろうな。

あの日俺は、今まで自分も知らなかった感情を、こんな子供にぶちまけてしまった。

好きやって。

家族としてだけでやなく、女としても見てるって。

お前がいたで、俺は前に進めたんやって。

世界で一番、愛してる　　て。

今まで兄貴みたいに慕ってきた男が、いきなりあんな風にブチ切れて、さぞかし怖かったやろうなあ。当たり前や、まだ十歳の子供なんやから。

気持ち悪いって自分でも思う。二十四の男が、十歳の女の子を家族としてだけじゃなく、女としても見ているなんて。

でも気付いてしまった。いや、認めざるを得なくなってしまった。気付いただけならまだ良い。自分の中に押し込めばいいだけの話だから。

なのに俺はしくじった。ちょっとしたきっかけで、自分を抑えられなくなった。

そんな身勝手な俺を、この子は

瞬間、瞼が熱くなった。

燦太郎は泣きそうになるのを必死に堪え、木村バージニア・モーニングの頭を撫でた。

「バーシユ、バーシユ」

頭から手を離し、肩を揺すりながら名前を呼んだ。バージニアが「うん」と呆けた声を上げて瞼を開いた。目覚めたばかりの彼女が「燦ちゃん？」と声を出すには時間が掛かった。

「悪いな、寝てたの起こしてもて。せやけど、お前に見てほしいもんがあるんや。お前の喜ぶもんや。渋谷まで行かなあかんで無理強いせんけど、学校は十一日からやし大丈夫やる？」

「よろこぶ……………」

「ああ。見たら絶対喜ぶで、な？」

寝惚けた頭でどこまで話を理解したのかは分からないが、目は覚めてきているのだろう。綺麗な緑色の瞳を輝かせ始めた。

「行く！」

バージニアは勢い良くベッドから立ち上がり、鼻歌を歌いながらクローゼットから上着とコート、そしてマフラーと手袋を取り出す。まるでデート前の女の子みたいやな。

「そんじゃあ行くか。眠くなったら言いや。おぶったるで」

「眠くないよ、早く行こう！ ほら早くう！」

今や眠気など完全にぶっ飛ばし、燦太郎の腕をグイグイ引っ張っていく。

大はしゃぎする彼女に釣られ、燦太郎も笑みを零した。

プロローグ？ 日本 〽 東京都 渋谷にて 〽 (後書き)

プロローグ終了！

本編に入ります！ (^ ^)

ここまでの感想とご意見、お待ちしております W W

開幕宣言 十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

〈ドイツ〉

いよいよ本編です！

まずは「開幕宣言」、待降節の前の日の出来事ですww いろいろと伏線を貼ってあるのでややこしいかも(汗)

「開幕宣言」を終えたら、一区切りとしてブログの特設ページに登場人物紹介や概要の付けたしなどをやりたいと思います ミ

それではいきます！ まずはドイツ編からww

開幕宣言 十一月二十五日(金)〜十一月二十六日(土)

〈ドイツ〉

ニュルンベルク ヘンカーシュテーク付近

旧市街の西、ペグニッツ川にヘンカーシュテークという屋根付きの木橋が架かっている。

その橋の側には、ワインハウスと呼ばれる赤い三角屋根の建物が二棟ある。昔はワイン倉庫や貧民収容所として使われていたらしいが、現在はエアランゲン大学の学生寮である。風呂とトイレは共用だが、一人部屋で生活必需品はほとんど揃っているので不自由しない。

セシル・シュライファーの一日は、この寮の一室から始まる。携帯のアラームが鳴り、朝日で朦朧とした意識がはつきりしていく。アラームを止め、眼鏡を外してから背伸びをした。

簡単に身支度を済ませると、部屋を出て朝食を食べに一階の食堂に向かった。部屋には台所があるのだから食堂なんて必要ないように思えるかもしれないが、起きたばかりで朝食を作るのは面倒くさいし、いちいち外食していたら金が掛かるということで、ここの学生ならタダで楽に食べられる食堂で朝食を済ませる者が多い。

朝食を食べると、セシルは部屋に戻らずその足で寮を後にした。

ドイツの初冬の寒さは凄まじい。十一月の半ばに入る頃には朝から道に氷が張っていて、マフラーと手袋無しでは外にも出られない。

ドイツでは初雪が降るのは大体十一月で、酷い場合は十月半ばに初雪という年もあった。今年はまだ降っていないが、現時点で道は凍っていて肌に突き刺さるような寒さだ。おそらく今日明日中には初雪が訪れることだろう。

セシルは寮のすぐ側に架かるヘンカーシュテークに足を踏み入れた。橋の周りは『首吊り役人の小橋』という意味の名前とは裏腹に、葉が枯れ落ちた木や川沿いに並ぶ木組みの建物が水面に映し出され、更に霧が掛かって幻想的な風景に仕上がっている。

冬になれば毎年目にする事が出来る、美しくて平凡な風景だ。

だが今日は、それに加えていつもと違うものを目にした。

ヘンカーシュテークのすぐ西には、マックス橋が架かっている。マックス橋の方は更に霧が濃く掛かっている。ほとんど見えない状態の
だが、セシルは視力が常人の倍以上あるので、濃い霧のその先にある一つの影を目で捉えられた。

マックス橋に、一人の少女が立っていた。赤毛を緩めの三つ編みで二つに纏めており、大人びた顔立ちに残る幼さから十代半ばと見受けられる。その綺麗な淡褐色の瞳は焦点が合っていないためか、死んだ魚を思わせる。セシルはその顔に見覚えがあった。

腕時計で時間を確認してから、少女の名を口にして呼び掛けてみた。
「マリー」
セシルの声に気が付いた少女がバツと顔を上げた。

パン工房ビーデンコルプ

地味で何の特徴もないヴァイスゲルバー小路だが、この時期だけは違った。

窓辺や玄関先がクリスマスの飾りで彩られ、可愛らしい木組みの家々をより綺麗に魅せている。だからか、この時期には不思議とヴァイスゲルバー小路を歩く観光客の数が増える。

それ以前に、待降節を目前としているこの時期には、ニユルンベルクに世界中から観光客がドツと押し寄せてくる。だからヴァイスゲルバー小路に足を運ぶ者が増えるのも当然だ。

アドベント待降節とは、イエス・キリストの降誕、つまりクリスマス待つ期間で、十一月三十日に最も近い日曜日（今年は十一月二十七日）からクリスマスイブまでの約四週間を指す。キリスト教の行事であり、ヨーロッパでは伝統行事として広く浸透している。

クリスマスが訪れるまでの約四週間は、あちこちの街の広場や通り

でクリスマス・マーケットという大規模な市を開き、様々な出店が立ち並ぶ。

今やヨーロッパ中で行われているが、発祥地であるドイツのクリスマス・マーケットは名が知れ渡っている。中でもニュルンベルクのは十七世紀から続く伝統的なもので、世界一有名と言われる。この時期に世界中から観光客がニュルンベルクを訪れるのはそのためだ。

そういうこともあって最近、店主のヨゼフ・クラントは大忙しだった。

いつもは近所の者や学生などが立ち寄る程度なのだが、小路を歩く人が増えると来店する客も比例して増える。とは言っても客で店内が埋め尽くされるわけではなく、客の出入りが多くなって見慣れない顔がちらほらと見える程度だが、それでも日常に変化が起こると、毎年のことはいえ慣れるまでやり辛いものだ。

店内の振り子時計がゴーンと音を鳴らした。見ると、時計はもう正午を指していた。

忙しいと時間が過ぎるのも早いものだと思いつつも、ヨゼフはせつせと会計を済ませて客の持ってきたパンを袋に詰める作業を、慣れた動作で繰り返していた。

また店の扉が開いた。入ってきたのは、金髪に青い瞳を持つ見目の良い青年だった。名はセシル・シュライファーで、N大の国際学部
の二回生。

常連というわけではないが、彼とは面識がある。彼はバイトで娘の家庭教師をしている。

レジに客がやってきたので、青年から視線を外してそっちの会計を始めた。いつもなら暇を持って余すことも度々あるのだが、客が多いので数分に一回くらいの割合で会計をしている。

数分後、セシルがレジにやってきた。いつもの通り、惣菜パンがほとんどで菓子パンはたったの一個だった。それも惣菜パンの大半はホットドックが占めている。

ヨゼフはさつさと会計を済ませ、手慣れた動作で淡々とパンを袋詰めしていく。後は袋に詰めた商品を客に渡す。またいつもの作業を終え、後は何の関係も無くなる。はずだった。

「入り口のテディベア、かつての想い人が作っただんですか？」

無表情を貫いていたヨゼフの顔色が変わった。思わず目を丸める。

「そんなことを話した覚えは無いぞ」

「あ、もしかして凶星ですか？」

からかうような口調が慫に触り、ヨゼフは眉を顰める。

「いや、さつきマリーに会いましたね。入り口のテディベアのことを聞いてみたんですよ。前から気になっただけでね。あなたに聞いても、貰ったの一点張りで怒っちゃうし」

笑いながら拗ねたような声を出すセシル。そんなことで拗ねられても困るというものだ。

「そしたら分からないって言うし、お父さんに聞いてもそっぽ向いちやうって言うから、もしかしたらって思って聞いてみたら、ビンゴだったわけですね」

ヨゼフはますます眉を顰めた。元から無愛想面だから、眉を少し寄せただけで近寄り難い雰囲気になる。だがセシルは相変わらず人懐っこい笑みを崩さない。

「あまり大人をからかうんじゃない」

「はいはい」

差し出された手にヨゼフは一瞬戸惑ったが、すぐに商品を受け取るためだと思い立った。見ると後ろに客が並び始めている。娘の家庭教師とはいえ、いつまでも客を引き留めるわけにはいかない。ヨゼフはパンの入った袋をサツと渡した。

「お父さん、顔赤いですね。思春期の学生みたいですよ」

袋を受け取る際に指摘すると、ヨゼフが顔を更に赤くして小さく舌打ちをする。セシルはクスクスと笑いながら「それじゃあ」とだけ言って店を出た。

本当に、大人のくせにからかいやすい人だな。娘はあんなに口がよ

く回って面白い物言いをするというのに。

ヨゼフの赤面を思い出してプツと吹き出していると、不意に風が強くなつて頬に鋭く突き刺さつた。初冬の風のアマリの冷たさに、一瞬笑つことも忘れて体を震わせる。

それにしても、かつての想い人ねえ。

セシルは顔を上げ、何気なく尋ねた単語を思い起こした。

昔のことをちよつと突かれただけで顔を真っ赤にする堅物なんだ。

そう何人も女性と付き合っていたはずが無い。あるとすればマリ
ーの母親と、そのかつての想い人くらいだろう。

ふと、今朝の橋の上での会話が脳裏に蘇つてきた。

「私、姉がいるかもしれないの」

「姉？」

「ええ。昨日、ちよつと暇つぶしに昔読んでた本でも見ようかと思つて倉庫を漁つてたら、本にこんなものが挟まつてて」

彼女がポケットから出した紙切れを受け取り、セシルは興味津々と目をやった。

【サンタさんへ、クラスメイトに『サンタさんなんているわけがない。あれはおとうさんなんだ』つてからかわれました。それをきいてすぐくシヨックでした。

わたしのおにいさんは『めにみえないだけで、ほんとうにいるんだよ』といえます。それでもきになつておとうさんにきいてみたら、おにいさんとおなじことをいって、それから『サンタさんにきいてみようか』といました。

どうかおしえてください。あなたはほんとうにいるのですか？

おへんじ、まっています。ジニーより 1997 9/21】

へえ、あの子の愛称と同じ名前なんだ。偶然だろうけど、筆跡も何となく似てる気がする。

「それと、これ」
彼女がポケットからまた二枚紙切れを出した。一枚は手紙、もう一枚は写真のようだ。
写真には、生まれてまだ数か月の金髪の赤ん坊が映っていた。すやすやと気持ち良さそうな顔で眠っている。写真から視線をずらし、今度は手紙の方に目を通す。

【明日、ドイツを発ちます。もう二度と会いません。せめて、この子の写真だけでも納めておいてください。私に出来ることはこれだけです。

ごめんなさい。そして、さようなら 1992 2/15】

名前は記載されていないが、おそらく『かつての想い人』といったところだろう。

詳しい事情は分からないが、振られたということは確かだ。

「多分ね、最初に見せた手紙……………」

言いにくいのだろう。彼女がまた言葉を濁したので、セシルが言葉を補うことにした。

「その赤ん坊なんだろうね。そして、手紙からして女の子だと思うよ。1997年に小学生だったってことは、今頃はもう大人だろうね。僕とは年が近いんじゃないかな」

憶測を淡々と述べたら、彼女は完全に無言になった。まあ無理も無い。父親に、自分以外にも子供がいるかもしれないのだ。さぞかし戸惑っていることだろう。

だが、これは家族の問題だ。他人の僕がこれ以上関わったところで傷を増やすだけ。胸の憂いのはけ口としてだけ機能すればいい。

「目つむってるけど、可愛いじゃん。きっと今頃美人になってるだろうね」

ここから先は話を別の方に持っていき、深入りはしないことにしたのだった。

ギムナジウム とある教室にて

ドイツでは、十歳で義務教育を修了する。

子供達は担任の先生や保護者などと話し合った末に、専門学校や上級専門学校を目指す実科学校レアルシューレや、職人や販売員などを目指す基幹学校ハウフトシューと、様々な進路に分かれる。そして、その内の一つがギムナジウムに進学する道である。

ギムナジウムとは、大学進学を目指す子供達が進学する八年制の学校である。いわゆる中高一貫教育で、ドイツに限らずヨーロッパに広く浸透している。

ローゼマリー・クランツは今、そのギムナジウムの教室で世界史の授業を受けている。

だが授業に耳を傾ける一方で、ローゼマリーは今朝の出来事を頭の中で思い描いていた。

早朝、父に『今日は朝補習があるから』と嘘を付いて早めに家を出た。

とはいえ、実際には朝補習などないし、学校に着いたところで教室には誰もいない。どうしたものかと考えながら何となく立ち止まった。いつも登下校時に通りかかるマックス橋だ。

うわ、凄い霧。

今朝は酷い寒さで、それを主張するかのように霧が濃く掛かっている。最早向こう側の景色など見えたものじゃない。木々や川も霧で覆われてぼんやりとしか見えず、いつも通る橋なのに、立ち止まって眺めていると異世界に迷い込んだかのような妙な気分になる。

今の私の心も、景色に例えればこんな感じかもしれない。

「マリー」

霧を払うような大声が、前方から耳に突き刺さった。思わずバツと

顔を上げる。霧が掛かっていて姿はよく見えないが、聞き覚えのある声だった。

「先生……?」

「ごめん。そっちは見えないよね。ちょっと待ってて、今そっち行くから」

右往左往している内にどんどん足音が近づき、やがて人影が霧の向こうから現れた。綺麗な金髪と青い瞳を持つ男で、やはり自分の知っているシュライファー先生だった。

「やほー」

待ち合わせ場所で友達を見掛けたかのように、片手を上げて満面の笑みを見せている。

「どうしたの? こっちは学校とは正反対でしょう?」

図星を突かれて、ローゼマリーは唇を少し尖らせた。その様子を見たセシルが、何が可笑しいのか軽く笑い声を上げた。

「図星を突かれると唇を尖らせる癖、お父さんと同じだね」

「そんなことないよ」

「いいや。傍から見ても、君はお父さんにそっくりだよ」

「そう、かな……」

セシルの台詞で、何故か昨夜の出来事を思い出した。出来事というほどのものではないが、どうしてもあの写真と手紙が頭から離れないのだ。

ローゼマリーが言葉を濁すと、セシルは食い付くようにまた問い掛けてきた。

「何かあった? 良かったら話してみない?」

突如の発言に、ローゼマリーは目を丸めた。

「ああ、深く考え込まなくていいよ。君の事情を誰かに言い触らすつもりは無いからさ。言い触らしたところで、俺にとっては何の得にもならないし」

「じゃあ、得になるなら言い触らすの?」

こっちは真剣に悩んでいるのに。そう思うと少し腹が立って思わず

強い口調になっていた。感情的になると、癖でこうやって理屈的な物言いをしてしまう。

そしてセシルの方は少しも動じた様子を見せず、逆に楽しそうに笑った。

「そういうところだけはお父さんと正反対だ。君はお父さんと違って、理屈をこねられる器用さがある。でも、君の物言いは嫌いじゃないよ。実に面白い」

褒められているのか貶されているのか分からない発言に戸惑っていると、セシルがまた口を開いた。本当に、この人の口はよく動く。よくそんなに言葉が次々と溢れてくるものだ。

「特になること自体思い浮かばないから、何とも言えないな。その時の気分に寄るかもね」

気分で言い触らされては堪らないと思いつつ、自分の事情を知って得をする人などいるわけがないと確信していた。知ったところで、憂鬱な気分になるだけだ。

それなのにこの人は話してほしいと言う。前々から思ってたけど、やっぱり変わった人だ。

「話したって、何にもならないと思うけど」

「ああ、そうさ。僕はただの野次馬だから、君の苦しみを拭い去るような力はない。でも、野次馬つてのは深いことなんか考えない。その時の気分で興味を持つだけだ。だからその内、気まぐれで聞いたことなんか頭の隅に追いやって忘れるよ。どうせ忘れて鮮明には残らないんだから、知られたところで君の懐は痛まないはずだ」

「そう、かな」

「うん。だったら目の前にいる野次馬にでも愚痴って、ちょっとでも気分を晴らすのもいいんじゃない？ 要するに、ストレス解消ってこと」

ローゼマリーはセシルの言葉一つ一つを頭の中で繰り返しながら、少し考え込んだ。

何でだろう。けして解決法にはならないのに、この人が喋ると妙に

説得力がある。丸め込まれるってこんな感じだろうか。

この笑顔を絶やささない青年に丸め込む気があつたのかは分からない。

「私

」

だけど結果的に、ローゼマリーは上手く丸め込まれる形で昨日のことを全て話した。

話したところで何の解決にもならなかった。顔色を窺いながら躊躇いがちに話す私に、あの人は終始相槌を打ち、手紙や写真を興味津々と眺めるだけだった。

でもその代わりに、彼は余計な世話を焼くことも説教をすることもなく、私の話を静かに聞いていた。それも笑顔で楽しそうに。

だからだろうか。次第に話すことへの抵抗感が薄れていって、気が付いた頃には順調に胸の内を晴らしていた。単に誰かに話したただけなのだが、それだけでも気が楽になった。

私には姉がいるのかもしれない。それも別の人の血が流れる姉が。父が昔、お母さん以外の女の人と関係を持ったのかもしれない。

でも、別にいい。それは過去のことだ。

知ったからって、この生活が変化するわけじゃないんだから。

ふと窓の外を眺める。薄暗くなって光を灯し出した街に、ひらひらと初雪が降り始めた。

早朝から街を覆っていた濃い霧は、もうすっかり消え去っていた。

ハuppトマルクト 中央広場

街の中心部である中央広場は人通りが激しく年中賑やかだが、この日は、更に輪を掛けて賑わっていた。午前中にクリスマス・マーケットが開催されたからである。

街中に屋台が立ち並び、あちこちで人の群れがドツと流れている。

中央広場に至っては屋台のテントと無数の人で埋め尽くされている。

更に街全体がイルミネーションや屋台の電灯によって暖かい光に包まれ、まだ一か月先なのにすっかりクリスマスの世界と化していた。綺麗……。

レイラ・ヴィーンは素直にそう感じながら、恋人の姿を探しつつ辺りを見回していた。周りは人で埋めつくされており、セシルの姿を探すのはかなり困難な状態だ。その上、混雑がひどくて、ずっと歩いているとだんだん疲れてくる。

だけど何でだろう。人混みは嫌いなのに、疲れるのに、こうして探し回るのが楽しい。

疲れる体に反し、レイラの心はドキドキと踊っていた。

店がずらりと並び、綺麗な飾りやイルミネーションで辺が彩られ、大勢の人で賑わって混雑している。確か、セシルと出会ったのもこんな夜だった。

彼と出会ったのは、今年の庭園祭の夜だった。

N大には毎年六月から七月に『お城の庭園祭』シュロス・ガルテン・フェストという大規模な祝祭がある。

ニルンベルクの北の岩山に建つカイザーベルク城の庭園が会場となり、多くの催し物が出される他、大規模な舞踏所が設けられる。参加者は毎年六千人に上り、経済界や政界の大物なども大勢訪れることもあって、バイエルン州の大学行事では最大イベントとされている。

当然、普段は勉強に明け暮れる学生たちもその日はお祭り気分で、日頃の苦労や憂さを晴らすように一日中大騒ぎし、舞踏会の雰囲気に酔う者ばかりだ。日が暮れても祭の火照りは覚めず、それぞれどこか更に盛り上がっていくのである。

レイラはそういった賑わいから離れ、城の側を流れる川のほとりで一人佇んでいた。

休憩所も各所に設けられているが、そこにも人が大勢集まっている。無益な人付き合いを好まない彼女としては、誰もいない静かな場所

で休みたかったので、休憩所は極力避けてわざわざ川のほとりまで来たのだった。

………疲れた。

ふう、とため息を零しながら心の中で呟いた。

卒業生で先生受けが良かったこともあり、レイラは毎年この庭園祭に招待される。付き合いがあるので参加はするものの、正直あまり気乗りしない。人混みが嫌いなレイラとしては、当事者でもないのにこういった賑わいに飛び込むのは時間の無駄でしかなかった。

だから、長時間こんな人混みの中にいると苛々してくるものだ。そこで、友人同士の会話が延々と続く中、タイミングを図って一人になって今に至る。さっきまで喧騒の中にいたから、川のせせらぎと夜風が心地良い。

もう少し休んだら、帰ろうかな。これ以上いたって何もならないし。そう思いながら静寂に身を沈めていた時だった。

「ねえ」

不意に後ろから声が掛かり、レイラは思わず肩を震わせた。反射的にバツと振り返る。

少し離れた所に、青年が立っていた。青年とはいつてもまだ少年らしさが残っているの、かなり年下だろう。

「隣、いいかな？」

レイラは戸惑いながら、とりあえず首を縦に振った。それを見た青年は、困惑するレイラなどお構いなしに歩み寄り、隣に腰を下ろした。

一人で休みたかったのに………。

内心で不満を呟きつつ、隣に座る青年を見た。

見事な金髪に澄んだ青い瞳で、男にあまり関心の無いレイラでも、素直に綺麗だなって思えた。その綺麗な顔に浮かべる柔らかい笑みは、板に付いている感じがする。

「せつかくの庭園祭だつてのに、こんな所で何してんの？」

突然の質問に、レイラは眉を顰めた。今となつては単にそう思つて聞いただけだと思ふのだが、この時は何だか馬鹿にされたような気がしてならなかつた。

「そういうあなたこそ、こんな所まで何しに来たのよ」

「人に聞く前に、まずはこっちの質問に答えてほしいな」

笑顔であつさり言いのけられ、レイラは肩を縮めた。この青年の言つてゐることは正しい。何一つ間違いはない。腹立たしかつたが、言い返すことは出来なかつた。渋々と質問に答える。

「休憩しているのよ」

思わず声に怒気が籠つてしまつた。今思えばかなり疲れていて、不機嫌だつたのだろう。それを察したのか、青年は少し目を丸めた。

「ああ、何だ。休憩してるだけか。いやあ、ごめんね」

「何が？」

突然謝られて訳が分からなかつた。しかも謝りながらも、柔らかい笑みを絶やしていない。

「『せつかくの庭園祭だつてのに』つて言つただろう？ 聞き方が悪かつたかなつて。不貞腐れているように見えたからさ、てつきり何らか事情があるのかと思つてね。せつかくの庭園祭なんだから機嫌直そうよつて意味だつただけで、余計期限損ねた？」

拍子抜けてしまつた。これまでに相手の物言いで腹を立てたことは何回もあるけど、まさかそれを謝られるなんて思つてもいながつたのだ。

もしかして、結構相手の表情とか伺つて話す人なのかしら。

そう思うと、不思議と苛立ちが消えていった。

「ううん、大丈夫。気にしないで。それで、あなたの方は何しに来たの？」

「頭を冷やしにきた」

「え？」

可笑しな物言いに思わず声を上げる。

「人混みの中って、暑いだろう？　好きなんだけど、ちょっと暑くなりすぎたからさ」

「なるほど」

青年の説明であっさりと納得した。文字通りの意味だったわけだ。その後、しばらく青年と話をした。突拍子も無いことを言うかと思えば、こつちを気遣う言動もちらちらと伺える。だからだろうか。話していて苦にならない。

不思議なことに、彼と話している間は一人になりたいと一度も思わなかった。

お互い、意気投合したという意識があったのだろう。それからというもの、休みの日などに時折会うようになった。無益な人付き合いは好まないはずなのに、彼との会話は心から楽しめるのだ。レイラは、会う度にセシル・シユライファーという人間に惹かれていった。そして、時が経つにつれて次第に恋人同士という関係になっていったのだ。

セシルとの出会いを思い出し、レイラは一人ほくそ笑んだ。大嫌いな人混みの中にいるはずなのに、ピクニックの前の子供みたいに胸が弾んで仕方ない。

クリスマス・マーケットも、庭園祭と同じように今までは別にどうでもいいイベントだったはず。それどころか、クリスマス・マーケットで喜んでいたのは幼少の頃くらいだった。

でも何故だろう。『恋人』という存在が出来た、それだけでこんなにも楽しい。

これが恋というものなのかしら？　だとしたら、何て単純な。でも、もっと味わっていたい。この胸の高鳴りは、自然とそう思わせるほど心地良い。

そうやって胸を高鳴らせながらしばらく人混みを歩いた。屋台が並び通りを抜け、広い通りを出たところで、ようやく彼の姿を発見した。

セシルは、中央広場にそびえ立つ『美しい泉』の石盤に腰を下ろしていた。

美しい泉というのは、高さ十九メートルの豪華な黄金の塔で、選帝侯や中世の英雄の像などで飾られている。この塔を囲む鉄柵には仕掛けが施されており、『周りの柵にはめ込まれた金色の輪を、三回転させる間に願い事を言くと叶う』という伝説が残っている。

クリスマス・マーケットの時にはこの塔の周りにも人が集まってくる。塔の下の石盤は休むのに丁度良いということで、人混みに疲れただけや待ち合わせをする者で溢れ返っていた。

ふと塔の周りに列を作って並ぶ数人の子供が目に入る。多分、金色の輪を探すためだ。

大人達は遊び心で、あるいはおまじないで輪を回す。それも大半は恋人達が占める。だが小さい子供などは純粹に伝説を信じ、鉄柵にはめられた小さな輪を探して回す。

そういえば僕も子供の頃、願い事を叶えたくてあの子と一緒に探したな。

昔はアメリカに住んでいて、時々父の故郷であるこの街に遊びに来た。その度に輪を探そうと塔に立ち寄ったけど、地元の間人間じゃないからどこにあるか分からなくて苦労した。

それでも願い事を叶えたくて必死に探した。この街で育った父が度々教えようとしてくれたけど、二人で探すのって意固地になっただけ。結局見つけられなかったけど。

もしあの時、素直に教えてもらって、願い事をしていたら今と違う未来だったかな。

『ずっとみんなが仲良しで、そしてジニーと一緒に幸せになれますように』

「セシル」

不意に耳元に声が掛かる。セシルは軽く驚きつつも、後ろを振り返った。

「どうしたの？ ぼおつとして。こんなに近づいてるのに気付かないなんて」

いつの間にか真後ろにしゃがみ込んでいたのは、数か月ほど前に付き合い始めたばかりの恋人だった。にこりと今日も綺麗な笑みを浮かべている。

「ああ、ちよつと子供の頃を思い出してたんだ」

「どんなこと？」

レイラは立ち上がり、セシルの隣に腰掛けながら尋ねた。

「この塔の伝説。小さい頃に願い事を叶えたくて輪を探したこと、君にもあるだろう？」

「あつたんでしょね。でも全く覚えてないわ。かなり現実的な子供だったから、他の子が探しているのを見て『馬鹿じゃないの』って思ったのはよく覚えてるけどね」

「うわっ、可愛げない子供だなあ。まあ君らしいけど」

子供らしくない昔話を懐かしそうに語るものだから、セシルは思わず苦笑した。

ん？

だがその時だった。レイラの背中越しにあるものを目にし、セシルはじっと見つめた。

塔の側にある聖セルバドウス教会から覗く、何やら怪しげな視線だった。セシルはその執拗な視線に見覚えがあった。

今に限ったことじゃない。あの日、とんでもない視力を得て以来、度々感じていた視線だ。

直接は見たことないけど、確かにいる。

色も形も捉えられないが、確かに存在する。この目でなら
「セシル？」

日頃から笑みを絶やさないセシルが突然真顔になったからか、レイラが疑問の声を上げる。

だが今は恋人の声に構わず、更に目を凝らして見つめた。
「どうしたの？」

そいつの視線は、自分だけでなくレイラにも向いていた。

へえ、驚いたな。

てつきり、僕だけかと思っていたんだけど……………。

「レイラ、今日は君の部屋に泊まってもいい？」

再び笑みを作つて尋ねる。唐突なお願いをしたからか、レイラは「え？」目を丸めた。

「寮の方は大丈夫なの？」

「許可は取つてあるよ。明日から連休に入るから、外出する人が多い。それとも迷惑かな？」

顔を覗き込んで尋ねてみる。案の定、レイラは破顔して頬を赤く染めていた。普段はすっかりとした大人の女性なのに、こういうところに少女の名残があつて可愛い。

「嬉しい」

「それじゃあ決まり」

本人の許可が出たところで、セシルはふと人の群れがこの中央広場へぞろぞろと集まつてくるのを目にした。一般人のみならずマスコミやテレビ局のカメラなどの姿もあり、フラウエン教会前に並ぶ屋台の上に建てられたスペースで待機している。

やがて、司会者の男がフラウエン教会のステージに上がってきた。それを合図に、スツとそこら中の灯りが消え始めた。ステージの照

明以外、屋台の電気もイルミネーションも、美しの泉のライトアップも何もかも。辺りはすっかり暗闇に包まれ、おかげでレイラの顔が見えにくくなった。それでも超人的な視力によって、どんな表情をしているかくらいは判別出来る。

会場から消えゆく灯りと同じく、人々の賑わいも波のようにサツと静まりかえる。数分後には、耳が痛いほどの静寂が会場全体を包み込んだ。

「皆さん、今年も無事クリスマス・マーケットの日を迎えられました」

たった一人照明に照らされる中、司会者は簡単に挨拶の言葉を述べ始めた。司会者の声がマイクを通し、静まり返った会場全体に響き渡る。

「それでは、いよいよクリスマス・キントの登場です！」

盛り上げる一声を最後に、司会者は照明の光から外れて暗闇に紛れた。照明は司会者に代わり、ステージに姿を現すクリスマス・キントへと当てられる。純白と金色が絶妙に組み合わせられた煌びやかな衣装を身にまとった十代の少女だ。

クリスマス・キントとは天使の姿をした、幼子のキリストである。ドイツには様々な種類のサンタクロースがいて、ニルンベルクではクリスマス・キントがそれに値する。毎年クリスマス・マーケットの屋台が開店した数時間後、日が沈んだばかりのこの時間にクリスマス・キントに扮した少女がフラウン教会のステージに上がり、クリスマス・マーケットの開幕を宣言する。

その瞬間を捉えようと、上下左右からフラッシュの音が続出し始める。

パツとステージを照らす照明が増えた。クリスマス・キントの左右には、いつの間にか金色の羽の天使に扮した二人の少女や、金管楽器を持った男達が立ち並んでいた。更に観客達の周りにもライトが照らされる。そこには純白の天使の衣装を着た大勢の子供達が控えている。ついに、クリスマス・キントが口を開いた。挨拶の言葉を述べ、微笑み

を浮かべている。二年に一度のコンテストでニルンベルクの象徴であるクリストキントに選ばれるだけあって、まだ十代の少女にも関わらず堂々としており、女神のような慈しみを感じられる。

「これより、2011年度のクリスマス・マーケットの開幕を宣言します！」

開幕宣言と共にクリストキントの両手が広げられ、腕から垂れ下がる金色の袖が煌びやかに揺れ動く。そしてクリストキントがゆつくりと両腕を閉じた瞬間、嵐のような拍手と口笛が会場を包み込んだ。金管楽器による演奏が始まり、純白の天使達の合唱が会場全体に響き渡っていく。合唱が始まると、人々の大歓声は静かに止んでいった。

「私ね」

ふとレイラが、オープニングを眺めながら呟く。セシルは「ん？」と聞き返した。

「生まれて初めてなの。こうして誰かとクリスマス・マーケットに来るの」

「へえ」

家族ともないのかと聞いてみたいところだが、ここでは止めておいた。毎年恒例の祝祭に誰かと来るのが生まれて初めてだと言うのだ。少なくとも良い思い出が口から出ることは無いだろう。オープニングの酔いに浸っているレイラに、それを無理に語らせようとは思わない。

「何でかな。毎年見てるのに、今年のクリストキントは特別綺麗に見える」

「確かに今年のクリストキントはかなりの美人だと思うけど、僕は君の方が綺麗だと思うな」

わざとおどけてみると、案の定レイラは「もうっ」と少しだけ声を荒げた。

「こうして一緒に並んで座っていると、物の見え方まで違ってくるってことよ」

穏やかな声で糸を紡ぎ出すように話すレイラの頬には、はっきりとは見えないものの赤みがほんのりと残っている。

「楽しい？」

「うん。とつても楽しい」

幸せそうに笑う彼女に釣られて、セシルも思わず笑みを浮かべた。自分でも驚くほど、珍しく心からの笑顔だった。

「それは良かった」

しばらくの間、二人は暗闇の中でオープニングセレモニーを静かに眺めていた。

N 大学生寮 ワインハウス

屋台を二時間ほど回った後、レイラのマンションに向かうことになったのだが、ふと用を思い出し、セシルは一度寮に戻った。正面玄関の側にあるポストを確認するためだ。

「ちよつと待つて。すぐ戻ってくるから」

レイラにはそう言って正面玄関の前に立たせてから中へと入った。

玄関のすぐ側のポストの扉を開く。何も入ってなかった。

「今日も、来てないか。」

セシルはふうと溜め息を付き、空洞ばかりが広がるポストの扉を閉めた。

明日、母から手紙が来なくなっただちよつと一か月になる。彼女はまめな性格で、月に一・二度の割合と、頻繁に手紙を出していた。

それが約一か月前から何の音沙汰もない。明らかにおかしいし、何より毎月届く手紙を楽しみにしていたセシルとしては面白くない。

しかも、メールも電話も繋がらないんだよな。

その上、今まで頻繁に届いていた手紙が一か月も無いと、何かあつ

たのではないだろうかと考えてしまうものだ。

明日も来なかったら、あっちの方に電話を掛けてみるか。

セシルはポストに背を向け、正面玄関を出た。確認している間、少し目を離していたので心配になったが、レイラは五体満足だった。

……………あれ？

何故か神妙な顔をするレイラ。とりあえず「お待たせ」の一言と共に笑みを見せた。

「大丈夫？」

「何が？」

「ポストを開いた時、少し悲しそうな顔してたわよ。誰かからの手紙を待つてるの？」

ああ、そういうことか。

心配そうに顔を覗き込んでくるレイラに、セシルは「まあね」とだけ答え、それ以上は何も言わなかった。彼女も追求することなく、ただ「そう」と同調してくれた。

「手紙、早く来るといいわね」

それに加え、この年上の彼女は優しい笑みを浮かべて暖かい言葉を掛けてきた。

「うん」

そんなに落ち込んで見えたのかなと思いつつも、内心では凄く嬉しかった。

開幕宣言 十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

ドイツ

次はアメリカ編ですWW

開幕宣言

十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

〈アメリカノ

開幕宣言のアメリカ編ですww

やっぱり伏線引きまくりです。後でちゃんと繋げんと大変なことになりそう(; ;)

マンハッタン ダウンタウン 某アパート付近

ジリリリと、けたたましい目覚まし時計のアラームが鳴り響く。

レオン・エヴァンスは眉を顰めて「うう」と唸り声を上げた。掛け布団に頭を潜り込ませたが、耳を劈く騒音に耐えかねず、仕方なく体を引きずるように起こしてアラームを止めた。

アラーム、止めとくの忘れた。

これ以上鳴らないようにアラームを切りながら、寝惚けた頭でぼんやりと気が付いた。

もうこの時間には起きる必要ないのだから。

レオンは溜め息を吐きながら、再びごろんと仰向けに倒れ込んだ。

『君、明日からもう来なくていいから』

店のマスターにそう言い放たれたのは、昨日のライブの後だった。

『そんな、いきなりそんなこと言われても……』

『君は確かに感性もテクニクもあるし、安定した聴きやすい音を出せる』

『では何故?』

『君には光るものが全く無いし、可能性も感じられない。君のライブの時に来る客の数が何よりの証拠だ』

淡々とした台詞だったが、レオンにはこれ以上にないくらい衝撃の強い言葉だった。

『そんなことは、プロのジャズピアニストなら誰にだって出来るからだよ』

鮮明に思い出してしまい、レオンは苛ついて舌打ちをした。

昔とは雲泥の差だな。

この時間から開いてるスーパーって無いよな。この辺りだと、セブンイレブンくらいか。

レオンは洗面所に行つて軽く顔を洗つと、財布を手にして上着とマフラーを身にまとい、戸締りをしてから部屋を出た。

十一月の下旬にもなると、まだ雪は降っていないものの、本格的に冬へと突入する。空気の冷たさは白い息がはつきりと見えるほどで、もはや肌寒いというレベルではない。

寒さに凍えながらも、近くのコンビニまで慣れた足取りで歩いた。中に入つて寒さを逃れたところでパンのコーナーに向かった。

入り口には赤い靴を模つたお菓子の詰め合わせや、赤鼻のトナカイのぬいぐるみ、パーティーグッズなど、クリスマスに備えたグッズが固めて置いてあるけど、生憎レオンは大の大人の上に扶養する家族もいないので必要無い。

買い溜めするには品数が少ない上に値段が高い。だがこの時間はスーパーなど開いていないし、とりあえず今は腹ごしらえさえ出来ればいい。

レオンは適当に惣菜パンをいくつか選び、レジに持っていった。店員は見慣れない顔の大人しそうな少女だった。高校生のバイトなのだろう。

「い、いい、いらっしやいませ」

声があからさまに震えていた。声だけじゃない。商品を手に取り、バーコードをスキャンする動作の一つ一つが非常にぎこちない。緊張しているのは一目瞭然だった。おそらく、昨日今日入ったばかりのバイトなのだろう。

「ご、合計、三ドル十セントになります」

財布から三ドルと二十五セント出す。料金を受け取る際も手が震えていて、案の定取り落しそうになる。ここまできると見ていて哀れになってくる。

「じゅ、十五セントのおつりになります」

差し出されたおつりを何気なく受け取るうとする。

だが、受け取る前に小銭が震える少女の手から零れ、コロコロとレジの下まで転がった。バイトの少女は慌ててレジから出てきて即座に拾い始めた。レオンもその場にしゃがんで一緒に小銭を拾う。後ろに客が並んでなくて良かったと本当に思う。

「あの、大丈夫ですか？」

あまりにも哀れで、拾いながら思わず声を掛けてしまった。

だが、本人は失態を犯したことで頭がいっぱいで反応を返す余裕が無いらしい。「申し訳ありませんっ」をひたすら繰り返しながら、拾った小銭をご丁寧に両手で差し出してきた。

その後、少女は相変わらず緊張していたが、これといったトラブルは無かった。バイトの少女が袋に商品を詰めて差し出し、それを受け取る。

「あ、ありがとうございます」

そうして何事も無くセブンイレブンを出て歩き出した。その数秒後だった。

ざわざわ、と何やら後ろが騒がしくなってきたことに気付いた。何事だと立ち止まって振り返った。同時に悲鳴と発砲音が耳に入る。

更にその後、怒鳴り声も耳に飛び込んできた。

「騒ぐんじゃねえ！」

コンビニの周りにはいつの間にか人だかりが出来ていた。何が起ったのか気になってレオンも人だかりの中に混じる。そして思わず「あっ」と声を上げた。

レオンが目にしたのは、サングラスを掛けてニット帽を被った小太りの男が拳銃を取り出し、怒鳴り散らしながらあのバイトの少女に銃口を向ける場面だった。

バン バン

天井に風穴が二つ開き、発砲した拳銃の口からは細長い硝煙が漂う。
「騒ぐんじゃねえ！」

今の銃声と男の怒鳴り声で、悲鳴が上がっていた店内が静まり返った。

「全員、そこから動かず手を上げる！」

男が銃を四方八方に向けると、人々は即座に言われた通りに両手を上げた。

エミリ・アンダーソンもまた然りだった。だがバイトである彼女には、それに加えて店員としての責任感が重く押し掛かってくる。

どうしよう、通報しなきゃ。

でも、怖い。体が動かない。

恐怖で頭を真っ白にしている間に、とうとう銃口がレジの店員であるエミリに向いた。

「おい、金を出せ」

「……え？」

「早くしろ！」

頭越しに怒鳴られ、エミリは思わず「は、はいっ」と返事をしてしまった。頭では通報しなきゃと思っているのに、手は死の恐怖から逃れようとレジへと伸ばしてしまっ

「ガッ！」

ガンと何かがぶつかる音と共に、男の呻き声上がる。

後ろ頭を押さえてうづくまる男の足元に、分厚い雑誌がドンと音を立てて落ちた。

「……」

男が頭を摩りながら後ろを振り返る。店内の客やエミリの視線も同

じところに集中した。

エミリは驚きのあまりに目を見開いた。

人々の視線を集めているのは、雑誌のコーナーに立つ中学生くらいの少年だった。初冬にしては軽い服装をしたその少年はただ一人手を上げることが放棄し、男にガンを飛ばしている。

「てめえ、何しやがる！」

男は逆上し、銃口をエミリから少年へと向き替えた。だが少年は少しも動じない。それがエミリの不安を更に駆りたてた。

茶髪のショートカットに琥珀色の瞳をしたその少年は、エミリの弟なのだから。

「ジェイミー、駄目！」

エミリはこれまでに無いくらい大声を出した。声が掠れて悲鳴のようになっている。

「逃げて！ 早くにげ」

「うっせーよ」

ジェイミー・アンダーソンのはつきりとした声が、姉のエミリの悲鳴を遮った。

「まったく、馬鹿姉貴が。こんな玩具突き付けられたくらいで何ビビってんだよ」

「ああ？」

ジェイミーの発言に声を荒げたのは、銃をかざす男の方だった。

「おいガキ、これで天井に穴開けたの見ただろーが。てめえの目は節穴か？ ええ？」

だがジェイミーは臆することなく、それどころか平然と歩き出した。「ハッ、それはこっちの台詞だ。大間抜け野郎が。間抜けもここまできると哀れになってくるぜ。その豚みてーな体同様、脳味噌も豚並みなんじゃねーのか？」

淡々と語る間も、ジェイミーの足は一步一步、確実に男へと近づい

ていく。

「ああん？」

「いや、豚並みじゃあ豚が可哀相だな。てめえは豚以下だ」

「このクソガキ！ これ以上近づくんじゃねえ！ マジでぶっ放^{ばな}」

「興奮するあまりに、自分で安全装置掛けたことにも気付いてねえ
つつつてんだよ」

ジェイミーは足を止めると同時に、はっきりとそう断言した。

店内に、沈黙が訪れる。

「……………え？」

これまで怒鳴り散らしていた男は言葉を失い、慌てて己が手にしている拳銃を見下ろした。

ズガアッ

突如、脳天に強烈な雷が落ちた。何が起こったのか理解する間もなく、男はその場で意識を飛ばし、仰向けに倒れ込んだ。

「ふん、呆気ねえ。豚どころかゴキブリ以下だな」

一方、店内の人々及び店の入り口に集まる人々が目にしたのは、何とも大胆な場面だった。

男が手元に目を向けたその一瞬に、ジェイミーが素早く足を振り上げて男の脳天に思いつきり踵を落としたのだった。

「^{リボルバー}拳銃に安全装置が付いてるわけねーだろ、ばーか」

ジェイミーは罵倒しながら、気絶している男の横腹を蹴り上げた。最後に軽蔑の眼差しをくれてやると、バツと顔を上げてレジに立つ姉を見た。エミリは未だに頭を真っ白にしているようで、呆然と人形のように固まっている。

「おい、何ボサツとしてんだ。警察」

「あ、う、うん」

ジェイミーが声を張り上げたことで、エミリがハッと我に返る。狼狽しながらも、今の状況を呑み込んで電話へと手を伸ばす。

だが通報する前に、パトカーのサイレンが耳に入った。

当然、あの状況で店内の人間が通報などする余裕などあるはずがない。ジェイミーは外の人だまりに一瞥をくれた。

「ふーん。野次馬も役に立つもんだな」

「野次馬だなんて、そんなこと言ったら駄目よ。通報してくれた人に失礼じゃない」

説教し出した姉に、ジェイミーは「本当のことだろ」と悪態を付きながら眉を顰めた。

「でも、ありがとう。ごめんね、こんな危ない目に合わせちゃってだが説教をする一方で、感謝と謝罪の言葉を一度に口にするエミリ。

「……危ねえのはどっちだよ。ったく」

「そつだね。ごめん」

困ったような笑顔を浮かべる姉を見て、ジェイミーは不機嫌そうにそっぽ向いた。

レオンは携帯を閉じ、ふうと息を付いた。

とりあえず、出来ることはした。後は警察が駆けつけてくれるのを待つだけだ。

良い年をした大の男が神頼みというのも気が引けるが、だからといって凡人の自分に中に入って強盗を抑え込む度胸も力も無い。周りの人々と同様、ただ奇跡を祈ってあの少年と強盗犯の駆け引きを見守っているだけである。

だが、このまま見ているだけというのは気が済まなかった。

トラブルの上だったとはいえ、ついさっき口を利いたばかりの少女

の命が危険に晒されていると分かると、どうも無視することが出来なかったのだ。

レオンは携帯をポケットに仕舞うと、再びコンビニ内の駆け引きに目をやった。

す、すげえ……………。

レオンの目に、拳銃を持つ男相手に臆することなく着々と距離を取る軽装の少年が映る。ガラス越しの上にこの人混みの中なので喋っている内容は聞き取れないが、それでも少年が口を開く度に男が血相を変えて叫んでいるのは明らかだ。

少年は一步一步、確実に男へと近づいていく。そして男の目前で足を止めると同時に、余裕の笑みを浮かべながら何らかの言葉を口にした。男が顔を真つ青にし、手元に視線を落とす。

その隙に少年が脚を振り上げ、渾身の力で踵を男の脳天目掛けて落とした。

体格の差は歴然としたものだったが、体格の勝る男の方が白目を向いて倒れ込んだ。

あれ、本当に子供なのか？

手ぶらだというのに大人の男、それも拳銃を持った相手に臆することなく歩み寄って、しかも一瞬で勝負を付けてしまったのだ。まるでアクション映画のワンシーンを見ているかのような気分だった。やがてパトカーのサイレンと共に警察がコンビニへと駆け込み、未だに気絶し続ける男に手錠を掛けて引きずっていった。

警察が来たなら、もう大丈夫だろう。

他人事ながらも一安心し、この場を立ち去ろうと歩き出した。

うわぁ……………。

人混みの中に、一人の男がいた。四十代半ばと見受けられるその男は、周りの人々よりも明らかに線の細い顔立ちで、黒い瞳をしている。そう、彼は日本人だった。

渡米早々、えらいもん見てしもうたなあ。

幼さの残る少年が、銃をかざす大男を足の一振りで決めるといって、アクションスターも顔負けの現場を目の当たりにしてしまったのだ。いきなり、こんな映画みたいなシーンを生で見れるとは思わなかったわ。さすが、ニューヨークといったとこやるか。

気絶する強盗犯を警察が引きずっていく姿を呆然と眺めていた男だったが、しばらくすると当初の目的を思い出し、ハツと顔を上げる。こんなところで油売つとる場合やない。仕事もあるんや。一刻も早く、探し出さんと。

男は体を翻し、早足でコンビニを去っていった。

それにしても、こっちもすっかりクリスマス色やなあ。

あちこちの店舗やビルにクリスマスの飾りが施され、店頭の品物もクリスマスに備えたものが出回っている。クリスマスツリーも、歩いているといくつも見かける。

街中のクリスマスの飾りに関心を示しながらも、男の頭の中はクリスマスどころではなかった。目的を果たすために、あちこちを見回しながらひたすら歩き続ける。

しばらくして、男はある場所で立ち止まった。そしてゆっくりと顔を上げる。

男の目の前には、巨大な噴水があった。今はクリスマス一か月前ということもあって、クリスマスのイルミネーションで鮮やかになっている。飾りだけでもこんなに存在感があるのだから、夜になって光を灯し出したらさぞかし美しいだろう。

ただ何故だろう。こんなにも美しいのに、噴水から流れる水の音を聞いていると、何でか胸を締め付けられる。

男は、自分でも気づかない内に顔を歪めていた。今にも泣きそうな顔だった。

一体どこにいるんや。

はよ帰ってこんと、その内ジニーが泣いてまうで。
燦太さんたにも、長いこと迷惑掛けれへんし。それに

大切な人達の顔をじっくりと思い描き、最後に愛する妻の名前を心の中で呟いた。

お前かて辛いやろ、マリア。

噴水から溢れ出る水が、どうしても妻の涙のように見えてならなかった。

コンビニエンスストア セブンイレブン

「お疲れ様でしたー」

正午を過ぎた頃になり、エミリはバイトを終えた。他の店員に頭を下げていると、店長に「ちよつと」と呼び止められた。今朝のことかなと思ったら、案の定そうだった。

「今朝は大変だったね。初日早々、あんな目に合ってしまったて」

「いえ、申し訳ありません。私が不甲斐ないばかりに」

ぺこぺこ頭を下げると、店長は笑って「いいよ」と言ってくれた。

「あの状況じゃ仕方がないよ。君に至ってはまだ新人なんだから、尚更だし。僕の方こそ、初日からあんな目に合わせてしまっして申し訳ないよ」

「そんな、とんでもない」

エミリは首を横に振るが、店長は陽気な笑顔で「もう過ぎたことだから」と宥めてくれた。初めてのバイト先の店長が明るくて優しい人で、本当に良かったって思う。

「それにしても、凄かったね」

「え？」

「君の弟だよ。銃を向けられても平然としていて、しかも一撃であの大男をノックアウトしてしまうんだからね。大したものだ。まだ中学生なんだろう？」

「あ、はい」

店長が「そうか」と言いながら、何やらポケットから紙切れを二枚出し、そしてエミリの前に差し出してきた。

「あ、あの、これ……」

店長の手にある二枚の紙切れは、ファミリーレストランのタダ券だった。

「良かったら、貰ってくれないかな？」

「そ、そんな、悪いです！ 私何もしてないし」

エミリは慌ててタダ券から身を引いたが、店長はなかなか引き下がない。

「大層なものじゃないから受け取ってよ。今朝、君の弟にお礼で渡そうと思ったんだけどね、『いらねえよ、んなもん。貰ったってゴミになるだけだ』って突っ返されちゃってね」

「えっ」

あ、あの子ったら……。

「すみません」

「いや、そんな謝ること無いよ。ただ、僕には使い道が無いんでね。だからお礼ってことで受け取ってほしいんだ。何なら、君からあの子に渡してくれてもいいし」

エミリは悪いなと思いつつも、「ありがとうございます」とお礼を言っただけで受け取った。ここまで言われたら、突き返すのは返って失

礼だ。受け取るしかない。案の定、店長も嬉しそうな笑みを浮かべていた。

店長にぺこりと頭を下げてから、エミリはセブンイレブンを後にした。外に出た途端、初冬の風が頬に当たり、思わず身を縮める。

街を歩いていると、至る所にクリスマス風の飾りやイルミネーションが見受けられる。まだ一か月先なのにも思いながらも、やはり綺麗な飾りには目を奪われ、惹かれる自分がいる。

ふと、体を寄せ合うカップルとすれ違った。二人とも傍から見ても幸せそうで、思わず振り返って目で追ってしまう。

私にもいつか、ああやって体を寄せて暖め合える人と出会う日が来るのかな。

こんな何の取り得も無い自分に、そんな日が来るなんて想像も出来ないけど、それでもやっぱりそんな日を夢見ていたい。

だけどそれ以上に、心配なことが頭を過ぎった。

『銃を向けられても平然としていて、しかも一撃であの大男をノックアウトしてしまうんだからね。大したものだ。まだ中学生なんだからっ?』

『「いらねえよ、んなもん。貰ったってゴミになるだけだ」って突っ返されちゃってね』

あの子は強い。身体的にも精神的にも、私なんかよりずっと。

だけど、あの相手を突き放すような言動は、どうにかならないかな。もっと素直にならないと、この先一人ぼっちになってしまっくんじゃないかって不安になる。

でも、元はと言えば私のせいだ。

あの時、私をもっとしっかりしてれば

「あの、すみません」

不意に後ろから声が掛かり、エミリはハッと我に返った。それから慌てて「はいっ」と返事をしながら振り返った。

顔の線が非常に細く、ブラウンの瞳をしており、肌の色も周りの人より濃い。おそらく日本か中国か、その辺りの観光客だろう。見たところ四十代くらいで、身だしなみがしっかりと整っていて物腰も柔らかい紳士的な人だ。

「グリニッジ・ヴィレッジ行きバスはこの辺りだと思つのですが、見つからないんです。どこにあるか分かりますか？」

男の話す英語は、生まれながらの滑らかさは無いが非常に聞きやすいものだった。

「えっと、この道を真っ直ぐ行つて、二つ目の交差点を右に曲がるとバス停が見えます。そこがグリニッジ・ヴィレッジ行きです」

エミリは道を指差しながらも、相手に分かりやすいように、いつもよりゆっくりと丁寧に喋った。その心掛けの甲斐があつて、男はすぐに納得した様子で「ああ、なるほど。そっちの方ですか」と言いながら首を縦に振った。

「助かりました。ありがとうございます」

男が帽子を取つて頭を下げたので、エミリもぺこりと頭を下げた。

男は最後に穏やかな微笑みを残してから、ちゃんと指し示した方向へと歩いて行つた。

エミリはその背中を見送りながら、弟の姿を思い浮かべていた。

あの子が、あの人くらい紳士的になつてくれたら嬉しいし、安心出来るんだけどなあ。

弟の行く末を案じながら、エミリは憂いの籠つた溜め息を零した。

それから数時間後。日は傾き、ニューヨークの冬空は急速に赤紫から紺色へと変わろうとしていた。街にはいつもの通り光が灯し出すが、この時期はクリスマスのイルミネーションや飾りがあちこちに散らばっており、賑やかな街により鮮やかな彩りを生み出している。ライブハウス『CANDLE』も、すっかりクリスマス色の色に染まっていた。入り口には巨大なクリスマスツリーが、店内には小さなクリスマスツリーがそれぞれ飾られ、至る所にイルミネーションが張り巡らせてあり、壁にはリースが掛けられている。店内にいる客の数はさほど多くないがそれなりに賑わっており、店内に流れるBGMがロマンチックな夜の雰囲気醸し出している。そしてこの時期には煌びやかなリスマスの飾りが加わることで、更に店内の賑わいを盛り立てている。人々は店内を流れる華やかな空気に浸り、それぞれの夜を謳歌していた。

ポロン、と鍵盤の音が明瞭に響く。

騒がしかった店内が、その旋律を合図にしんと静まり返る。待つてましたと言わんばかりの勢いで、一斉に奥へと注目した。客達の視線の先には、白い照明に晒された小さなステージがある。ステージにはドラムとベース、ピアノの三つが並んでおり、それぞれの楽器の奏者が既にスタンバイしている。光と無数の視線を浴びる中、ピアノ奏者であるレオンの指が動く。最初は一つ一つの音を噛みしめるように、ゆっくりと鍵盤を鳴らす。美しく、滑らかなピアノの独奏が、先ほどとは一転した静かな店内に響き渡る。

しばらくして、ピタリとピアノの音が止んだ。再び店内に、耳が痛くなるほどの静寂が訪れる。

チツ　チツ　チツ　チツ

ドラムの音を筆頭に、ピアノとベースの音が一齐に響いた。三つの楽器の音が重なり合い、三重奏となって店内を軽やかに踊り出す。静かだった店内が、あっという間に活気に包まれた。

先ほどの賑わいとはまた別種の、演奏と客達と奏者が一つになって店に溶け込んだような、一体感のある空気に満ち溢れていた。

ライブが終わった後、レオンを含む三人の奏者は、店の控え室へと向かった。控え室は賑やかな店内とは打って変わり、驚くほど閑散としている。

三人の内かなりの巨体の持ち主で、黒い肌のビリー・アームストロングがパイプ椅子にドンと腰を落とした。続いて金に近い茶色の長髪で、派手なヘアバンドが特徴的なカラー・パストリアスがパイプ椅子に腰掛け、最後に入ったレオンが扉を閉めてからパイプ椅子に座った。

「とりあえず、今日もお疲れ様ってことで。さっそくお伝えしたいことがあります」

カラーが調子の良い声で話を持ち出すと、レオンが呆れたような声を上げた。

「いつもの寒いギャグなら聞かねーぞ」

「最近、本格的に『寒く（コールド）』なってきたけど、僕の髪の毛は少しも色あせないさー！」

しーん……………。

「……このクソガキが、これ以上言ってみろ。腹に一発入れるぞ」
しばしの沈黙の後、ビリーが頭に血管を浮かべ、物騒な台詞を吐きながらバキボキと指を鳴らす。眼力が人よりある上に筋肉質な体つきをしているからか、全身から凄まじい迫力を放っている。

「ビリーさん怖すぎ！」

「当たり前だ。このくそ寒い時期に寒いギャグを聞かされるこっちの身にもなってみろ」

そしてとどめに、レオンが眉を潜めてばっさりと言い放つ。二人の男に睨まれたカラーはしょんぼりと頂垂れて「二人とも、冷たい」と泣き言を口にしたが、このお喋りな男は「だけど！」とすぐに立ち直って別の話題を出してきた。

「お二人さん、生憎今日は僕の一発芸はここまでっ。これから話すのは、男にとってはマジでグッドな情報ッス」

「何だと!!」

途端に、二人は一斉に身を乗り出した。もちろん「男にとって」という部分にである。

「それは気になる。なあレオン」

「ああ。早く教えろ」

最初とはまるきり正反対の反応を示す二人を見て、カラーは声を荒らげて講義の声を上げた。

「二人とも気持ちは分かるけど、あからさまに反応が逆じゃないっすか！」

「やかましい！」

「いいから早く教えろ!!」

二人が同時に叱咤したところで、カラーは不満げに口を窄めた。だがまたしてもすぐに気持ちを切り替え、寒いギャグと罵られたことなど忘れたかのように目を怪しく光らせ出した。

「実はですね、明日から新しいバイトが入るんですよ。そのバイトつてのが結構かわ……」

カラーが言葉を繋げようとしたその時だった。

ガチャッと扉が開く音と共に、一人の女性が控え室に入ってきた。女性の耳に入れる内容ではないと、カラーは口から出そうとした言葉を慌てて呑み込んだ。

「やつほー、お疲れ。今日の演奏も良かったよ」

のんびりとした明るい口調で話すその女性は、一つに束ねた黒髪に黒い瞳、一重瞼に健康的な肌色をした在米中国人の女性、ティンヤンファ天焰花だった。

「今日は君たち三人にお知らせしたいことがあります。さ、入ってヤンファが後ろを向き、開いたままの扉へと声を掛ける。その声を合図に、人影がひよこつとその姿を現した。

「明日から来月末のクリスマスシーズンの間、このバイトとして入ってきたジェシカ・フィッツジェラルドだよ。みんな、仲良くしてあげてね」

へえ、結構可愛い子じゃないか。

ヤンファの隣に並んだのは、緩やかなパーマの掛かった茶髪と琥珀色の瞳を持った可愛らしい高校生くらいの少女だった。少々派手な格好だが、それが少女の整った顔を引き立てている。

「明日からここで働かせて頂きます、ジェシカ・フィッツジェラルドです。短い間ですが一生懸命頑張りますので、皆さんよろしくお願ひします」

この時のレオンは、数日後に彼女の秘密を知ることになるなんて夢にも思っていなかった。

グリニッジ・ヴィレッジの大通り

雑談を終えた後、バンド仲間と別れて店を後にしたレオンは、家路

に着くべく大通りを一人歩いていた。時計を見ると、あと十五分ほどで日付が変わる時間だった。

かなり夜が深くなっているが、街は夜の闇を喰らい尽くさんばかりに輝いていた。通りには様々な人種が入り乱れ、あちこちのビルや店が眩しいくらいの光を放っている。それにクリスマス飾りやイルミネーションが加わることで、普段よりも一層華やかさに磨きが掛かっている。こうなると、昼間よりもむしろ夜の方が活気に満ち溢れているくらいだ。

レオンにとっては見慣れた光景で、特に何を思うことも無く淡々と大通りを歩いていた。

だが、今夜はレオンにとって予想外の出来事が起こった。

うわっ！

横の路地から出てきた影が、不意に目の前に飛び込んでくる。それと同時に体に強い衝撃を感じた。危うく倒れそうになったが、踏ん張って何とか持ちこたえた。

だが相手の金髪の女性は衝撃に耐え切れず、思いつき尻餅を付いてしまったようだ。その拍子に中身を少しぶちまけてしまったらしい。女性の足元にいくつか持ち物が落ちてている。

「だ、大丈夫ですか？」

レオンは慌てて落ちた物を一緒に拾い、女性に渡してから手を差し伸べた。何だか、今日は朝っぱらからトラブル続きだな。

金髪の女性が軽く呻き声を上げ、それからバツと顔を上げる。

あ、れ？

「あ、はい」

女性の方も慌てて差し出された手を取って立ち上がった。

「ごめんなさい、ぶつかっただ上に拾わせてしまって」

女性は頭をペコペコと下げて謝るが、レオンの思考は全く別のところに行っていた。

この人、どこかで見たような……。見事な金髪に、薄い灰色の瞳をした女性だ。少し小皺があるものの、元の顔の作りが整っている。若い頃はさぞかし美人だったことだろう。

だがそれを差し置いても、この顔には見覚えがあった。

「いえ、怪我はありませんか？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます」

それに、声も聞いたことが……

あ。

「すみません、急いでのので失礼しますっ」

女性はまたペコリと頭を下げると、再び慌ただしく走り去っていった。

レオンはしばらくその場に立ち尽くし、後ろ姿が見えなくなるまで女性を目で追った。女性の姿はあっという間に見えなくなり、そこでようやくやく歩き出す。

深く考え込みながら歩き続ける。あまりにも動きが鈍いので時折人にぶつかって「ぼおっとしてんじゃねーよ」と言われるが、今のレオンの脳内はさっきの女性でいっぱいだ。

そして数分後、歩いている内に一つの可能性に辿り着いた。

あの人、まさか………マリアさん？

レオンは再び足を止め、その場で呆然と立っていた。

何故だろう。こうして立ち止まると、何だかいつも歩く街が異世界

のように見えた。

開幕宣言

十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

〈アメリカノ

次は日本編の開幕ですWW

開幕宣言 十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

〈日本/東京

開幕宣言、日本編ですww

次からいよいよ待降節へ突入します
三

下北沢 某マンション

時は遡り、一日前に戻る。

ピピッ ピピッ ピピッ ピピッ

氷月燦太郎ひづきさんたろうは手を伸ばし、テーブルの上に置いてある携帯を取ってアラームを止めた。

気だるげに眠たい目を擦り、リビングのソファから体を起こした。次第に意識がはつきりしてくると、燦太郎はふとあることを思いだした。

そういえば、バーシユ預かることになったんやな。

ちょうど学校の時間や。起こさんと。

物音一つしないし、おそらくまだ眠っているのだろう。燦太郎はふうと息を付いてソファから腰を上げた。木村バージニア・モーニングが眠る部屋の前まで移動する。本来は燦太郎の部屋なのだが、寝室は一部屋だけなのでバージニアに好きなように使わせ、今はリビングのソファをベッドの代わりにしている。

「バーシユ」

ノックをしながら呼び掛けてみたが返事が無い。もう一度ノックしてみる。

「バーシユ、朝やで」

やはり返事が無い。あかん、こりゃあ確実に寝てるわ。

「入るで」

こうなったら、直接体を揺すってやる他無い。寝ていると分かっているが、燦太郎は一応声を掛けてから扉を開き、中に入った。

ぬいぐるみに囲まれながらスヤスヤと眠るバージニア。やはりいつも通り白クマのぬいぐるみを抱いている。ぬいぐるみは全部、燦太郎がプレゼントした物だ。中でも白クマは唯一、彼が昔手作りした

ものである。やはり店で売っているものよりはみつともない。

それでもバージニアが寝る時に胸に抱くのは、必ずへんてこな手作りの白クマだ。燦太郎としては嬉しいことこの上無い。

「バーシュ、バーシュ」

細い肩を揺すったところで、バージニアの重たそうな目蓋が開き、緑色を覗かせた。「ううん」と声を漏らしながら起き上がり、腕を伸ばして大きく背伸びをする。

「おはよう」

ほくそ笑みながら話しかけると、バージニアは顔を上げて腕を下ろした。虚ろな瞳でばおつと燦太郎を見つめ、ニコツと笑窪えくぼを浮かべる。

「おはよおママ」

惚けた声を漏らしながら、ふわあつと大きな欠伸を吐き出した。緑の瞳が涙で滲む。

「誰がママや、誰が」

首を傾げるバージニア。燦太郎は呆れつつ苦笑した。相変わらず凄まじい寝惚けぶりやな。

「……燦ちゃん？ 何でここに？」

「何でも何も、ここは俺の部屋やで」

バージニアは「んー」とまた惚けた声を出して欠伸をする。

「……………あ、そうだった」

ようやくここに来た経緯を思い出したようだ。バージニアは寝ぼけた顔に笑みを浮かべた。

「おはよう燦ちゃん」

「おはよう。そろそろ学校行く時間やで」

「んう、めんどい」

バージニアが面倒くさそうに毛布を捲ったところで、朝食の準備をするかと部屋を出てキッチンに向かった。目玉焼きを作ってソーセージを大量に焼き、トーストにマーガリンをたっぷり塗る。朝食が出来上がって「バーシュ」と呼ぶと、バージニアは「はい」と大

変元気のよろしい声で返事をした。お泊り気分で興奮し、すっかり眠気は吹っ飛んだらしい。

「わぁ！ソーセージ！」

焼きソーセージはバージニアの大好物だ。その愛着は、ソーセージの大食いなら優勝出来るかもと言いのけるほどだ。俺やったら、朝からこんなこてこてしたもん出されたくないけどな。

「今日はお泊り祝いってことで特別や。俺はいらんで、全部食べてええよ」

「やったあ！」

バージニアは椅子に座って「いただきまーす」と言うなり、飢えた捨て犬のようにがつつき始めた。ソーセージを頬張る姿が何だかハムスターみたいで、思わずプツと笑ってしまった。

「どうかしたの？」

「いや、何でもない」

バージニアは不思議そうに首を傾げたが、今は食べることの方が重要みたいで、「そう」とだけ言って追求しなかった。バージニアの咀嚼音とフォークの音が、何でか心地よく聞こえる。

余程嬉しいのか、しばらくすると鼻歌を歌いながら食べ出した。それはさすがに行儀が悪いので「ご飯中に歌わない」と注意する。「はい」と不満そうな声が上げつつも、すぐに怒ることも忘れてまた好物のソーセージにかぶりつく。

その動作の一つ一つが愛くるしくて、燦太郎はとうとう破顔した。

バージニアが部屋に来たのは、昨日の夕方だった。

まだ仕事の最中だったので、バージニアのことを知ったのは叔父からのメールを見てからだだった。美容部員の仕事は目が回るほど忙しいと知っているの、そこを配慮して母や叔父が日中にメールや電話を寄こすことは滅多に無い。

きつと何かあったのだらう。燦太郎は休憩の間に、直接叔父に電話を掛けることにした。

「もしもし叔父さん。久しぶり」

『燦太か。悪いな、仕事中華のに』

「ええつて。余程のことがあったんやろ？ どないしたん？」

『あのな、忙しいところに悪いんやけど、お前に頼みたいことがあるんや』

「気せんでええよ。毎日忙しいんやで、それ言い出したらキリないし。で、頼みつて？」

『実はな、明日からアメリカに出張でしばらく帰れへんのや。そんなで、急なんやけど……』

数秒ほど間が空いた後、電話口から聞こえたのは驚きの一言だった。

『今日からジニーを、しばらく預かってほしいんや』

予想外の一言に、燦太郎は目を丸めた。

「預かるつて、叔母さんがいるんやろ？」

『それが……マリアは急用が出来て、一か月ほど家空けることになったんや』

「叔母さんが？」

あの真面目で娘思いの叔母さんが、誰もいない家に娘を一人で置いていくなんて。

それに、一か月も家を空ける急用つて一体……。

「一か月つて……それほんまなん？」

『ああ。せやから明日から家に誰もおらへんのや。いくらもう十歳やからつて、さすがに一か月間ずっと一人にしとくのは不安やし、精神面でもよろしゅうないし』

いつもは楽観的な叔父さんだが、その時ばかりはかなり切羽詰った様子だった。当然だ。愛娘を家に一人で置いておくのが心配で仕方ないのだから。

それに俺も心配や。寂しがり屋で甘えん坊なバーシユを、一か月も一人きりにするなんて。

燦太郎はふうと息を付き、深く悩むことなく同意した。

「分かった。しばらくは俺が預かる。とりあえず、帰るの遅なりそ
うやで、勝手に部屋に入って置いてっくれればええわ。合鍵、あ
るよな？」

『ああ。ごめんな、ほんまに』

「ええって。ちゃんと面倒見るで安心しいや」

燦太郎は母子家庭の一人っ子で、その上母親が仕事で忙しくてあま
り一緒にいられなかったこともあり、小さい頃から叔父の家にしよ
つちゅう遊びに行っていた。

そのため、バージニアが赤ん坊の頃から妹のように可愛がっていた
のだ。今やバージニアの世話は彼の十八番である。

『おおきに。助かるわ』

電話越しでも、叔父のホツと胸を撫で下ろす姿が容易に想像出来た。

そして今、バージニアが目の前でソーセイジを頼張っているわけだ。
この子にとって、母親と長い間離れるなんて初めての経験や。

さぞかし寂しいやろうに、そんな嬉しそうに笑って。

こりゃあ、すっかり面倒見てやらんな。

健気に笑う姿を前に、男であるにも関わらず母性本能をくすぐられ
る燦太郎だった。

朝食を済ませた後、支度を終えて1LDKの部屋を二人一緒に出た。
バージニアはこの辺りの道にまだ慣れていないので、今朝はバス停
まで同行して道案内することになった。

「ねえ燦ちゃん」

「ん？」

「久しぶりだね、こうやって二人で一緒に歩くって」

「ああ。ここ数年は忙して、年末年始とお盆くらいしか会えへんか
つたし」

「そうだよ、燦ちゃん全然来てくれないんだもん」

ぷくつと頬を膨らますバージニア。初冬の寒さで顔の筋肉がガチガ

手に固まっても可笑しくないこの時期に、表情豊かなのも相変わらずで。

「ごめんな。寂しかったん？」

「うん。でも今は全然寂しくないよ。これからはしばらく一緒だも
ん」

「せやな」

ジャケットをまとい、ランドセルを揺らしながらはしゃぐバージニアの後ろ姿を、燦太郎は顔を綻ばせながら見ていた。

井の頭線の車内

『下北沢ー、下北沢ー』

車内に停車を知らせるアナウンスが流れる。

ipodで音楽を聴いていた金亮（こがねやう）は、このアナウンスでバツと顔を上げた。

電車が停車し、人の群れが車内に流れ込んでくる。井の頭線の朝のラッシュは夕方ほど混み合ってなく、下北沢駅まではかなりのスペースを取れる。大体この駅を境に、だんだんと定員が増えて面積が狭くなっていくのだ。今の時点ではまだ余裕だ。それ故に、乗ってくる人々の顔をじっくりと窺うことが出来る。

とはいえ、亮の場合は生来の目付きであまりじろじろと見ていると、どうしてもガン付けていると勘違いされて怖がられるのでチラチラと視線を配ることしか出来ないのだが。

ガンを付けてしまわないよう気を付けながら見つめること数十秒、探していた顔を発見出来た。小さく高鳴っていた胸がドキンと弾む。

来た。

亮はその女の子を見失わないように、だけど間違ってガン飛ばさな

いように見つめ始めた。イヤホンは付けっ放しだが、今はi podから流れる音楽も耳から耳へとすり抜けていく。女の子は空いていた亮の向かい側に立ち位置を定めた。胸の鼓動が更に高まる。

別に美人なわけでもスタイルが抜群なわけでもない。どこにでもいる平凡な女の子だ。セミロングの黒髪に地味な色合いの服装で、むしろあまり目立たないタイプだ。しかも身長もかなり低く、つり革にも手が届かないほどである。

彼女のことは半年前から知っているけど、未だに声を掛けるどころか目すら合わせられない状態だ。怖がられるんじゃないかという不安と、好きな子を前にした気恥ずかしさで、どうしても塞ぎ込んでしまう。不幸なことに、亮はその軽そうな外見とは裏腹に、女の子にナンパをする柔軟さなど持ち合わせていなかった。

亮は女の子から視線を外し、チラリと視線を横にずらした。隣にいる乗客は180センチ以上ありそうな長身で、少し癖のある髪を肩の近くまで伸ばした青年だった。顔立ちが整っていて、左の口元にある黒子がよく似合う。目元だってスツと引き締まっているのにどこか優しげで、相手を無意識に怖がらせてしまう亮とは大違いだ。

あの子も、こういう人に見つめられるんだったら大歓迎なんだろうなあ。

自分に声を掛ける度胸が無いことは分かっている。

だけど、身長に恵まれていない上に見つめるだけでガンを飛ばしてしまう亮としては、隣の顔も身長も恵まれている青年が羨ましくて仕方が無かった。

視線に気付いたのか、隣の青年が亮をチラリと見た。視線が合つて、亮は慌てて顔を背ける。

何となく忍びない気持ちになり、再び向かい側の女の子を眺め始め

た。身長が足りなくてつり革に掴まれないからだろう。振動で揺れる中、体を支えようと必死に踏ん張っている。

どこかに掴まるころが出来れば、楽になるだろうなあ。

亮は支えてあげたい衝動に駆られ、ドキドキと心臓を弾ませた。だがどうしても声を掛けられず、そんな自分が情けなくてもどかしかった。

胸の鼓動がますます高まっていく男を余所に、電車は相変わらず淡々と揺れていた。

渋谷 西武百貨店A館 一階化粧品フロア

十一月下旬から十二月上旬は、街中のデパートでクリスマスセールが開催され、激しい競争が繰り広げられる時期だ。

西武百貨店では毎年、十二月上旬にクリスマスセールが始まる。クリスマスセール期間中は客足が倍増するので、売り上げを大幅に伸ばす絶好の機会でもある。当然、新商品やクリスマス限定品などが加わって、いつもの倍以上の品を仕入れることになる。

在庫の整理は毎日の仕事だが、十一月下旬は試供品を大量に導入し、セールに引き出す品を検討する時期なので、いつもより頻繁に整理をしなければ在庫がたちまちいっぱいになり、おしくらまんじゅう状態と化してしまう。

こうなると当然、戦力になるのは男だ。

「パシリだ」

同僚の眼鏡、ひろ広瀬遼一が台車に段ボールを置いたところで溜め息混じりに呟いた。

「在庫が爆発寸前なのは分かってる。でも、だからって何で今なんだ！ つしやあ昼飯だってまさにその瞬間に『悪いけど、食べる前

に在庫整理してきて』って！ 労働基準法違反だ！」

涙ながらの演説に、燦太郎も思わず作業の手を止めてしまった。はあと溜め息を吐く。

「それを言うなや。余計腹が減る」

「ああ、女ってどうしてこう人使いが荒いんだ？ なあ！」

「しゃあないやろ。新人だけじゃ手え回らんのや。今年入ってきた子、全員女の子やしな。そんで男は俺とお前だけやし」

これ以上文句を言っても虚しくなるだけなので、再び作業に入ることにした。

「お前は良いよ。化粧品が隙間なくぎつしり詰まった段ボールを一度に八つも、それも涼しい顔で持てる化物だからな！ どうなってるんだよお前の筋肉は！ 鉄腕アトムか？」

現実味の無いことを恨めしげに叫ぶ親友。だが、遼一の言っていることは事実だ。

隣で作業に入り出した燦太郎は、現に片手に段ボール箱を四つずつ掲げ、一度に計八つの段ボール箱を軽々と台車に乗せているのだ。

「それロボットやし。俺は歴とした人間やから」

燦太郎はその細身の体に似合わず、並外れた怪力を持っている。もちろん、ロボットなどではない。現代の日本を生きるただの人間だ。

この怪力だって、あの日を境にいつの間にか得たものなのだから。

「歴とした人間は一度に八つも段ボール持てねーよ！ 仮面ライダーでもねー限りな！」

「鉄腕アトムの次は改造人間かい。ええ加減、機械から離れろや。てゆーか、そんな力の限り叫んでると、昼飯にあり付く前にくたばってまうで？」

「うう、それは困る」

昼飯を話題に引つ張ることで、喋りっ放しだった遼一は泣く泣く作業を開始した。

そうして倉庫の段ボール箱を控え室に運ぶ作業を繰り返し、十分後には全て運び終えた。

そして控え室の棚に段ボール箱を仕舞う作業に入り、圧倒的力の差によって一・二段目には遼一が、三・四段目には燦太郎が梯子を使つて詰めることで分担した。その後だった。

ピロロン、ピロロンと携帯の受信音が控え室で響いた。

「おい燦太郎、携帯鳴ってんぞ」

段ボールを一足先に仕舞い終えた遼一が声を掛けてきた。

こっちは梯子に足を掛けながら片手に二つの段ボール箱を持ち、もう一方の手でそこから一箱ずつ取つて仕舞っているところだ。いくら怪力でも気を抜いたら落としかねない。

「悪い。今手え離せへんのや。そのバグン中に入ってるで出しといて。それメールやで」

「分かった。つか離せたらマジで人間じゃねーもんな」

遼一は小棚の上に置いてある燦太郎のショルダーバッグを手に取り、チャックを開いた。

その瞬間、遼一が絶句した。バッグへ伸ばしていた手が、ピタリと止まる。段ボール箱を詰めている燦太郎はそれに気付かない。

「遼一、どないしたん？ 目え付きやすいところに入ってるはずやけど」

だが受信音がいつまでも鳴り止まないことには、さすがに違和感を覚えたのだろう。燦太郎は最後の一個を棚に詰めながら尋ねた。

まだ返事が無い。とうとう受信音も鳴り止んだ。

「何やねん、いきなり黙りこくつて」

燦太郎は最後の一個を詰め終えたところで、梯子から下りて遼一の所へ歩み寄った。燦太郎の気配に気づいた遼一は、何故か恐る恐るといったように振り返り、顔を青ざめていた。

「なあ……まさかお前、小学生の女の子を誘拐したのか？」

「はあ？」

意味不明な発言に、燦太郎は思わず声を荒げた。

「悪いことは言わない。すぐに帰してやれ。ニュースで報道されてからじゃ遅いんだ。な？」

終いには両肩を掴まれ、言い聞かせるような強い口調で犯罪者扱いされた。

「アホか。何で俺が小学生を誘拐せなあかんねん」

「じゃあ、これは何だ？」

遼一が神妙な顔付きで燦太郎のバッグに手を突っ込み、ある物を目の前に突き出した。

携帯ではない。だがそれを見た瞬間、燦太郎も絶句した。

遼一が目の前に出してきたのは、どこからどう見てもリコーダーだった。

何でこんな物が、と首を傾げたが、すぐに原因は分かった。

そのリコーダーには、『四年二組 木村バージニア・モーニング』と油性マジックで書かれたシールが貼られている。

ああ、しまった！

「……それ、従妹のや」

「え？ 従妹？」

「……渡すの、忘れてしもうた」

燦太郎はその場で脱力し、右手で頭を抱え込んだ。

某小学校付近の住宅街

それから数時間後の夕方。バージニアは唇を尖らしながらとぼとぼと歩いていた。

「燦ちゃんのバカ……」

カアカア、とカラスの鳴き声が耳に入る。余計虚しくなってきた、

はあと溜め息を付いた。

今日の昼、六限目の休み時間にロッカーからランドセルを出して開いた時だった。

「……………あれ？」

思わずその声を漏らした。今朝入れたはずのリコーダーが入っていないかったのだ。

「あれ、あれ……………」

ランドセルの中はもちろん、ロッカーも手当たり次第探した。ただ見つからない。

慌てふためきながら探していると、親友の白館灯里しむだてあかりが声を掛けてきた。

「木村、どうしたの？」

「リコーダーが無いの。今朝ちゃんと入れたはず……………あ」
喋っている途中で、バージニアの記憶回路が繋がった。

「入らへんのか？」

「うーん、入るのは入るんだけど、そうすると今度はフタ閉まんないの。何か他にカバン持ってた方がいいかな。丁度良いの無いか探してくる」

そう言って立ち上がった矢先、燦太郎の「ちょい待ち」の一声が上がつて立ち止まった。

「リコーダー一本くらいでカバン探すのもアホらしいやろ。俺が持つてる」

「え、いいよそんなの。どうせバス停まで行ったら、あたしが持つてなきゃいけないだし」

「せやけど、そろそろ出んとバス間に合わんで。とりあえず、な？」

「うーん……………」

確かにバスに乗り遅れるのは困る。バージニアは素直に好意に甘えることにした。

「分かった。はい」

リコーダーを受け取ると、燦太郎はそれをショルダーバッグに仕舞い込んだ。

『バス亭に着いたら、ちゃんと渡したるでな』

「ただど渡されなかつた。あのリコーダーはまだ燦太郎のバッグに入ってたままなのだ。」

「忘れた？」

「……うん。どうしよう、灯里ちゃん。リコーダーだから人から借りれないし」

六限目は音楽。ここ最近では発表会に向けた曲をリコーダーで練習する授業が続いている。

「諦めな」

灯里から返ってきたのは、清々しいほどに割り切った答えだった。

「そんなあ、リコーダーの授業なのにリコーダー無いなんて恥ずかしいよお」

「だってどうしようもないじゃん。ま、適当に頑張んなよ」

バージニアは、あっさりと言い放つ親友を恨めげに見つめた。

「ほら行こう。忘れ物した上に遅れちゃまずいでしょ」

バージニアは泣く泣く教科書と楽譜だけを手にして教室を出た。

その日は運悪く、リコーダーを忘れたのはバージニアただ一人だった。音楽の先生は優しいし、忘れ物の常連ではないので叱られることは無かった。それに音楽室に置いてある予備用のリコーダーを貸してくれたので、一応授業に参加することは出来た。

「だけどホッと安心したのも束の間。一人だけリコーダーの色が違くと、自然と視線を集めてしまうのだ。もちろん視線を向けてきたクラスメイト達に悪気は無かつただろうが、バージニア自身は恥ずかしくて集中出来なかつた。」

何より、いつものリコーダーじゃなかつたから使い勝手が悪く、特に高い音が満足に出せなかつた。

リコーダーの授業は好きなのに、この時は早く終わってほしいと願ってばかりいた。

「バカ、バカ、バカ……」

もちろん、燦太郎が悪いわけじゃない。あの時の判断は適切だったと思う。悪いのは、前の日の夜にリコーダーを入れておかなかった自分だ。

「燦ちゃんのバカ、おせっかい」

でもあたし、どうせ後で持たなきゃいけないんだからいいって言ったのに。

『バス停に着いたら、ちゃんと渡したるでな』

「嘘つき」

違う、嘘なんか付いてない。

本当に渡すつもりだったんだ。ただ忘れちゃっただけで。

第一、あたしだって忘れてたじゃない。いくら燦ちゃんと並んで歩くのが久々で嬉しかったからって、リコーダーを預けてること忘れちゃいけないかったのに。

自業自得だつて分かっているのに、どうしても燦太郎を責めてしまふ自分がある。今目の前に燦太郎が現れたら、謝られても怒りに任せて八つ当たりしてしまうだろう。

それがまた更に、落ち込むバージニアを苛つかせた。

「もうっ！」

苛立ちが頂点に達し、たまたま足元に当たった石を蹴り上げた。

同時に、横の曲がり角から人影が出てきた。

「イデッ！」

その呻き声とガシャンと何かが落ちる音で、バージニアは苛立ちも

忘れてバツと立ち止まった。そして目の前の人物を見て愕然とした。
「……………っ……………て」

バージニアの前で頭を押さえているのは、逆立った金髪をした小柄な男だった。パンク風の軽いフアッションをしていて、いかにもコンビニの前でたむろっついそうな感じである。男の足元にはたった今バージニアが蹴った石が転がっている。石を改めて見ると、ピンポン玉ほどの大きさはある。当たったらかなり痛いだろう。

数十秒後、痛みが治まってきたのだろう。男は頭を押さえながら石が飛んできた方へ顔を向けた。物凄い目力を持つ鋭い瞳が、バージニアの姿を捉える。男の目付きがあまりにも鋭く、バージニアは思わずビクツと肩を震わせた。

「ご、ごめんなさい！ あの、その……………」
どうしよう。この人、凄く怖そう。

今やバージニアは泣きたい気分だった。実際、涙目になっている。ついに男が頭から手を離し、体を完全にこっちに向けた。恐怖のあまり、体が動かない。謝ろうにも顔を直視出来ないし、口をパクパクと動かすのがやっとの状態だ。

助けて、燦ちゃん、パパ……………ママあ。

「あの、そんな怖がらなくていいよ。俺、大丈夫だから」

……………え？

自分の耳を疑い、恐る恐る顔を上げる。

パンク風の格好をした鋭い目付きの男は、困ったような笑みを浮かべていた。そして少し屈み込んで、バージニアの高さに合わせた。

「この辺って人通り少ないけど、今の俺みたいにたまたに誰か通る時あるから、気を付けた方がいいよ。その人が怪我でもしたら大変だしね」

話し方も極力丁寧で、涙目になっている自分を気遣っているのは明らかだった。見かけは怖いのに、表情と声が凄く優しい。

「あの、頭……」

「あ、これくらいなら大したこと無いよ」

確かに血は出ていないけど、全くの無傷ではない。こめかみの所に痣が出来ている。

「ごめんなさい」

ようやく心から謝罪の言葉が出た。さっきの身の危険を感じて咄嗟に出た言葉とは違う、ちゃんと気持ちの籠ったものだった。

「もう大丈夫だから、気にしなくていいよ。それじゃあ」

男は優しい笑みでバージニアに手を振りながら、その場を去っていった。

バージニアはしばらくその場に立ち尽くした。今度は恐怖ではなく、安堵感と温かい気持ちでバージニアの体を満たしていた。

あの人、あんな鋭い目付きをしているのに、凄く穏やかで優しくかった。

人は見かけに寄らないって、本当なんだ。

でも、あそこまで外見と中身が極端な人って、そうはいないだろうなあ。

もう、会えないのかなあ。

途端に、あの男の人とこのまま別れるのが嫌になった。別に深く関わりたいたってわけじゃないけど、それでも二度と会えないというのは、何だか寂しい。

バージニアはふと湧き上がってきた好奇心に背中を押されるように、男が歩いて行った道へと曲がった。細い一本道を真っ直ぐ突き進むと、住宅街を抜けて広い通りに出た。辺りをキョロキョロと見回しながら通りを行ったり来たりするが、あの金髪の男はどこにもいない。

やっぱり、そう簡単に会えるわけないか。

さすがに諦めて、戻ろうと歩いた道を逆に辿り始めた。その途中だ

った。

通りかかった老舗の窓の向こうに、あの金髪の男の姿があった。

あ、いた！

バツと足を止め、その老舗の前で立ち止まった。もう一度じっくりと窓の向こうを見て確認したところ、見間違いじゃなかった。ちゃんとあの男の人がいる。

店内ではざわざわと終わらない雑談が繰り広げられていた。中には金髪の男の他に、白髪混じりのおじいさんと数人の若物がいる。おじいさん以外は、金髪の男とよく似た年代だろう。

わあ。壁にギターがいっぱい。楽器屋さんかな。

店内の壁には、たくさんさんのギターが飾られている。クラシックギターやアコースティックギター、エレクトリックギターなど、種類がいっぱいあって数えきれない。それにギターだけでなく、ピアノやベース、ドラムなどいろいろな楽器が豊富にある。

あの人、音楽やってるんだ。

バージニアの心は歓喜と好奇心で踊っていた。

だけど、さすがにずっと覗いていては怪しまれる。バージニアは窓から頭を引っ込め、引き続き店の前に居座り、若者達の雑談に耳を傾けた。

声は聞こえるけど、窓ガラス越しなので話している内容までは分からない。けどみんな親しげに話をしていて、和気あいあいとしている。内容が分からなくても、聞いていてとても楽しかった。

しばらくすると、店内から雑談の気配が消えた。何だろうと思わずまた窓から覗き見る。

店内の人達は、それぞれ楽器の前に立ってスタンバイしていた。金髪の男の人は、ギターかベースを掲げている。よく見えないから、

どっちか分からない。

それにしても、みんな格好いいなあ。

スタンバイしてるだけでこんなに格好良いのに、演奏始めたらどうなるんだろう。

どうしても気になり、再び窓を覗いた。胸の中は期待でいっぱいだ。店内で、「スリー、ツー、ワン、はい」と掛け声が上がった。

まずドラムが入った。タタタタンとノリの良いリズム感に、こっちの胸も騒ぎ出す。

次に、ピアノとベース、エレクトリックピアノが順番に入ってくる。ベース特有の低音、よく響くピアノの激しい旋律、エレピの程好い電子音が混ざり合い、一つの音になる。

そしてギターが入り、ギューインと弾みと迫力のある音で曲を高めへと引き上げていく。ここでギターを鳴らしているのが金髪の男だと分かり、バージニアはますます心を弾ませた。

次第にピアノを中心にそれらの音が重なり合い、タンタンタンと一斉に弾んだところで演奏が止んだ。二・三秒ほど間を置いてピアノの独奏が始まった。

今までの激しいリズムとは打って変わり、小川のせせらぎのような音が響く。

うわあ。

バージニアはすっかり、窓の向こうの演奏会に釘付けになっていた。すごい。こんな小さくてボロボロな店なのに、あの人達が楽器を鳴らすと、たちまち大きなライブステージに早変わりしちゃった。

小さな老舗の中での演奏会は、幼いバージニアの目にはとてつもなく新鮮で輝いて見えた。

すごい、本当にすごいよ。みんなかつこよくて、輝いていて、息がぴったりで、すごく楽しそう。

あの輪の中に混ざれたら、どんなに楽しいだろう。
いいなあ。

もはやリコーダーの件で苛立っていたことなど、この時にはすっかり頭から消え去っていた。

「あ」

ピアノのソロが続く間、亮の間の抜けた声が上がった。

「どしたの？」

長い髪に緩いパーマを掛けた垂れ目の女、吉田よしだみのりが尋ねてきた。
「あの子……………」

「何？ あの窓から覗いてる外人の女の子、知り合い？」

「いや、さつきちよっとぶつかって」

「怖がられただろ？」

からかうような口調で口を挟んできたのは、能面顔のニット帽男、藤崎ふじさき草平くさへいだった。

「まあ……………うん」

こっちは極力優しく接したつもりだが、それでもかなり体が強ばった様子だった。何だか可哀想なことをしたな。

「そりゃ怖いよなあ。』どこ見てんだコラア！』って怒鳴られると思つと」

「俺は怒鳴らないよ。あれ以上怖がらせるの、かわいそうだし」
演奏中にこうして普通に喋ってられるのは、ジャムセッションだからだ。楽譜無しでその場で自由に演奏して合わせるセッションだからこそ、演奏の合間にこうやって会話をすることが出来る。

「それにしても、あの子何で中入ってこないのかな？ やっぱ金の顔が怖いから？」

「だろうぜ。さっきは人目に付く可能性があつたから我慢してただけで、ここに入った瞬間、人が変わったかのように『てめえ、さっきはよくも俺様にぶつかつてくれたなおい！ 俺様のオニユ一の服が汚れちまつたじゃねーか。どうしてくれんだよ、ああ？』って言われたらどうしよう。ふえーん、って感じ」

「最後の『ふえーん』って、アンタが言うためちやキモいんですけどお」

「……単に珍しがってるだけだと思つよ」

勝手に妙な図を想像して興奮している二人に対し、侮辱されている当の本人である亮は怒りもせず、平常通りの態度であつさりと突っ込みを入れた。

「でも、さつきからずっと覗いてるじゃん。やっぱ入りたいんだよ。楽器が好きで、欲しいのがあるんだけどお金持ってないしーって感じ？」

「楽器とかじゃなくて、俺らのライブに興味持ってる可能性もあるぜ。亮、お前どう思つ？」

「うーん、多分そのどっちかだと思つけど、もしかしたら両方かもしれない」

「なるほど」

「ねえ、試しに中に入れない？ どっちにしる、興味津々なものには変わりないんだし」

三人で盛り上がっているところに、みのりとは対照的なツリ目をしたショートヘアの女、増永ますなが絵梨えりが加わり、得意そつに一つの提案を示した。

「いいねそれ！」

みのりが身を乗り出す。その際に弦に指が触れてポロンと音が鳴つた。

「あ、音鳴っちゃつた。このままベース入りまーす」

勢いに乗ってみのりがベースを鳴らし出す。

「お、何か盛り上がってきたねー。よし、ドラムも入ってー」
絵梨が指示すると、草平もドラムを叩き出した。

「さてと、このままテンション上げて私も入るとしますか」

リーダーシップを発揮していた絵梨も続いてエレピを弾き始めた。

「というわけで金こがね、呼んできて」

「え、俺が？」

「何よ、嫌なの？ 今演奏してないのアンタだけでしょ？」

絵梨が眉を顰めると、亮は困ったように口籠った。

「嫌ってわけじゃないけど、俺に声掛けられるのは怖いんじゃないかなあって」

「そんな弱気だから未だに彼女出来ねーんだよ、お前は。というわけ
で俺が……」

「アンタは駄目！ 鼻の下伸ばして、可愛い子に声掛けたいって下心丸出しなんだよ！」

「ええー」

「つたく、一人は見かけ倒しでもう一人はロリコンかよ。使えねー
野郎共だなおい！」

「俺はロリコンじゃねえー！」

叫んだ勢いでドラムの勢いが強くなり過ぎた草平を、絵梨とみのりが揃って「ドラムうるさい！」と叱咤する。その後は無視して女子二人で話を進めた。無視されて落ち込む草平を、亮が歩み寄って背中をぽんと叩いて憐れむ。

「役立たずの野郎共よりも、やっぱここは同性のウチらが行った方が
良いか」

「じゃあ私いこっか？」

「そうだね。みのりは和み系だし、声掛けても怖がることないっし
よ。よし、行っといで！」

「オツケー。それじゃあ行ってきま」

「まだ止めとけ」

みのりの言葉を遮ったのは、ピアノ担当の白髪混じりのオーナー、
ますながえいさく
増永栄作だった。

「何でよお父さん。良いじゃない見物くらい」

娘の絵梨がエレピを弾く手を止め、非難の声を上げる。だが栄作は
動じることなく、淡々とピアノを弾き続けながら言葉を続けた。

「駄目とは言わんが、もう少し様子を見た方が良い。子供ってのは
好奇心が強いが、同時に飽きるのも早く、またすぐ別のところに興
味が行ってしまうもんだ」

「そりゃそうだけど……」

「例えば、興味を持った部活があったとする。先輩や友達に誘われ
たて何となく入部してみたけど、思っていたのと違って続かなかっ
た。これと同じようなパターンになることが多い」

「ああ、なるほど」

絵梨だけでなく、この場にいる全員がそれぞれ納得したようにコク
コクと頷いた。

「そこで、これから一週間、さり気なく様子を見るんだ。もしほほ
毎日のように来たら、それは余程関心を持っているということだ。

中に入れて間近で聴かせてやると良い。小学生なら、居残りでもな
い限り下校する時間が大幅に遅れることも無いだろうしな。どうだ
？」

「……………分かった」

絵梨が口を尖らせながらも再び演奏を始めたところで、栄作は「お
い」と亮に声を掛けた。

「大丈夫だとは思うが、念のために言っておく。この一週間、まか
り間違つてガンを飛ばさんように気を付けるよ。折角興味を持って
も、怖がって逃げ出してしまふからな」

やるつもりもないことを忠告されて少し泣きたい気分になったが、
亮は素直に頷いた。

「よし。それじゃあ、そろそろサビに入ろうか。亮、ギター！」
栄作の掛け声と共に、亮は愛用のギターをかき鳴らした。

下北沢 某マンション付近

マンションの前に辿り着いた燦太郎は、はあと深い溜め息を吐いた。もう何度目だろうか。昼にリコーダーの失態を知ってからは、一人になると絶えず溜め息を漏らす始末だ。

バーシユ、怒ってるやろなあ。

あの子が一度機嫌を損ねると、立ち直るまでに時間が掛かることは今までの経験でよく知っている。今回は好きな音楽の授業に差し支えたのだ。さぞかし怒っているに違いない。

そう思つて左手にはケンタツキーの袋を、右手にはおやつ用のソーセイジの詰め合わせが入ったコンビニの袋を下げている。これであつさり機嫌を直してくれるとは思えないが、燦太郎としては何か詫びをしてやらないと気が済まなかった。

言い訳無しでひたすら謝つて詫びをすること。今の自分に出来ることはこれしか無い。

燦太郎は意を決し、勢い良くマンションへと入っていった。そのままエレベーターで四階まで上がり、自分の部屋の前で再び立ち止まった。

今までの経験で、こういう時には扉を開けた瞬間に物が飛んでくることも目に見えている。大抵はぬいぐるみといった柔らかいものだけど、あんまり機嫌が悪いとノートや教科書、酷いと筆箱やランドセルなどが飛んでくることもある。今日は何が飛んでくるんやろなあ。

燦太郎は慣れきっていることもあって、あつさりと腹をくくつて扉を開けた。

「ただいまー」

瞬間、胸に何か飛び込んできた。

だが、ぬいぐるみでも教科書でもノートでも文房具でもなく、バージニア本人だった。その振動で少しふら付いたが、「っと」と踏ん張って体を持ち直した。

「お帰り！」

バツと上げた顔には怒りなど欠片も無く、満面の笑みが広がっている。

予想外の展開に一瞬たじろいだが、こういう経験が全く無いわけではなかった。

こうやって抱き付いてくるのは、余程良いことがあってそれを報告したくて仕方ない時だ。

「あのねあのね！ 今日帰りに石蹴ったら、怖そうなお兄さんに石ぶつかっちゃって、怒鳴られるかなって思ったんだけど、その人見かけと違って凄く優しくてね、また会えないかなってついていたら、めちゃくちゃ格好良いの見つけたんだよ！」

余程嬉しいことなんだろう。早口過ぎてあまり内容を呑み込めない。「おいおい、落ち着きや。とりあえず中入らせて。それからゆっくり聞かせて。な？」

「はい！ あっ、ねえそれ何？」

離れたところで、両手の袋の存在に気が付いたのだろう。目を輝かせて尋ねてきた。

「ケンタッキーのチキンとフライドポテト、そこでコンビニのソーセージ」

袋を見せると、バージニアは「わあ！」と歓喜の声を上げた。

「こんなにいっぱい、どうしたの？ これもお泊り記念？」

「いや、これは今日の詫びや。リコーダー、渡すの忘れてしまったやろ？」

バージニアが「あっ」と素っ頓狂な声を上げた。どうやら、今の今

まで忘れていたようだ。

「ごめんな、大変やったやろ？」

「ううん、もう良いの。今日の帰りに良いことあったの、ある意味それのおかげだから」

よく分らないけど、あんまり嬉しそうに話すものだから燦太郎も嬉しくなった。

「そうか。でも、これからは氣い付けるでな」

「うん！ ほら、もういいから早く入って」

もはやリコーダーのことなどどうでもいいのだろう。まだ靴も脱いでいない燦太郎の腕をぐいぐいと引っ張る。いくら嬉しくても、さすがに土足で入るわけにはいかない。

「ちよお待って。まだ脱いでへんのやって」

言いながら靴をサツサと脱ぐ。足を踏み入れた途端にバージニアに腕を引っ張られてリビングへと連れていかれた。その時だった。

平和なムードをぶち壊すように、携帯の着信音が鳴り響いた。叔父からの着信だった。

「悪い、電話や。ちよお待ってな」

「ええー」

不満げな声を上げるバージニアに「ごめんな」と宥めながら笑いかけ、小さな頭を撫でる。それから洗面所に移動して「もしもし」と電話に出た。

『ああ燦太、今大丈夫か？』

「大丈夫。仕事終わってもう部屋におるし。どないしたん？」

手短に済ませたくてすぐに本題に入ったが、そう簡単に終わらせられない内容ではなかった。

『ごめん。実はな、お前に嘘付いてたことがある』

「え？」

『あの時、仕事をやったやろ？ せやから一気に全部伝えんと差し支えると思ってな』

叔父の声は非常に深刻なものだった。それも昨日の電話の時よりも、

更に重い。

「……どないしたんや？」

『マリアは、叔母さんは用事で一か月家空ける言っただけど、ちやうんや』

叔父の声が、あまりにも重過ぎる。嫌な予感が体中を駆け巡った。

『置手紙をして、いなくなっ たんや』

心の蔵を貫かれたような感覚に襲われ、しばらく呆然と立ち尽くした。

「………嘘やろ？」

あまりにも唐突過ぎて信じられず、ようやく返せた言葉がそれだった。

開幕宣言 十一月二十五日(金)～十一月二十六日(土)

〈日本／東京

さて、いろいろと伏線を貼りまくりました(;´∩｀)

これから少しずつ紐を解いていく所存ですww

道はまだ長いぞ(´∩｀)。(´∩｀)ヨッ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8428y/>

窓サン

2011年11月27日05時06分発行